

立正大学博物館年報

19

令和 2（2020）年度

立正大学博物館

序

令和2年度は、コロナ禍のため、立正大学博物館も長期間にわたる休館を余儀なくされた。空調など万全を期したはずが、湿度調整が思うようにならず、結果的に展示室などにカビが発生することを許した。見学者があれば、外気が流入し、それなりの環境を保てるのであるが、人の動きがないと空気が思うように流れない。環境は、人間の行動と連動し、想定を超えた事象を引き起こす。しかも、立正大学博物館の周辺の樹木が、開館当初はほどよい緑を添える存在であったものが、建物に覆いかぶさるほど繁茂してしまった。その結果、樹木が日光を遮断し、カビや苔を誘発する結果をもたらした。

そのため、館内および展示ケースなどの清掃と防黴処置を実施し、周辺に生い茂る樹木の枝の間伐をおこなった。ケースなどが清潔になり、滞った空気が一掃され、周辺も明るくなった。実施にあたっては、立正大学博物館予算だけではならず、大竹副学長・熊谷管財課・熊谷総務課のお世話になって、ようやく実現できた。深く謝意を表するところである。

特別展としては「立正の考古学」を企画し、開館と同時に公開するべく準備を進めたが、年度内の公開は叶わず、新年度からの公開となった。この特別展は、第2代立正大学博物館館長池上悟教授の退職を期して、立正大学における考古学のあゆみを振り返ったものである。立正大学から多くの考古学者が輩出していることを改めてご確認いただき、独自の学風を形成してきたことに思いを馳せていただければ、本特別展の目的は達成できたことになる。

企画展は、休館のために実施できなかったが、コロナ禍の影響をつくづくと実感する昨今である。予定通りに進まない年度であったが、コロナ禍は終息の兆しをみせておらず、来年度も大変な一年になる可能性を否定できない。

令和3年6月15日
立正大学博物館
館長 時枝 務

目 次

序

例言

I. 博物館の概要	3
1. 組織と職員	
2. 立正大学組織表	
3. 立正大学博物館規定	
4. 立正大学博物館細則	
5. 施 設	
II. 事業報告	8
1. 運営委員会	
2. 開館日数・入館者数	
3. 出 版	
4. 資料活用	
5. 展 示	
6. 教育普及	
7. 調査・研究	
8. 所蔵資料の整理・修復	
9. 館内整備	
III. 受贈図書目録	41

例 言

1. 本書は、令和2年度における立正大学博物館の活動についての報告である。
2. 本書の執筆・編集は、時枝務館長の指示により学芸員の足立佳代が担当した。
3. 令和2年度の事業実施にあたり、下記の方々、機関にご協力を賜りました。記して感謝いたします。

坂詰秀一初代館長 池上 悟二代目館長

新井 端 新井雅幸 池田敏宏 池田奈緒子 井上尚明 上野真由美 大谷 徹
大塚香里 鹿島昌也 金子直行 蔵持俊輔 紺野英二 高橋杜人 瀧口美佳
手島芙実子 竹花宏之 朝重嘉朗 中山 晋 野本孝明 増田 修 村松弘一
矢口翔馬 安井千栄子（敬称略：五十音順）

桐生市教育委員会 熊谷市教育委員会 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 埼玉福祉会 栃木県埋蔵文化財センター 富山市埋蔵文化財センター 鳩山町教育委員会 東松山市教育委員会
文殊寺

立正大学：考古学研究室 熊谷学術情報課 熊谷管財課 熊谷総務課 品川学術情報課
秘書課 文学部事務室

-3-

3. 立正大学博物館規定

(趣旨)

第1条 立正大学学則第9条の規定に基づき、熊谷キャンパスに「立正大学博物館」(以下「博物館」という。)を置く。

(目的)

第2条 博物館は歴史・宗教・芸術・民俗・産業・自然誌に関する学術的資料(以下「資料等」という。)を収集・保管し、これを組織的に展示し、広く社会に公開するとともに、これらの調査研究を行うことによって大学における教育・研究の発展に寄与することを目的とする。

(事業)

第3条 博物館は前条に規定する目的を達成するため、次の事業を行う。

- (1) 資料等の収集、整理および保管
- (2) 資料等の展示および公開
- (3) 調査研究活動
- (4) 調査研究成果の発表および出版
- (5) 本学における博物館関係科目、その他関連授業科目の教育活動への協力
- (6) 講演会、講習会および特別展示会の開催
- (7) その他必要な事業

(職員)

第4条 博物館に次の職員を置く。

- (1) 館長
- (2) 専門職員

(館長)

第5条 博物館に館長を置く。

- 2 館長は博物館を代表し、博物館の業務を統括する。
- 3 館長は全学協議会に諮り、本学専任教職員より学長が任命する。
- 4 館長の任期は3年とし、再任を妨げない。
- 5 館長が欠けたときは補充しなければならない。この場合において、その任期は前任者の残任期間とする。

(専門職員)

第6条 専門職員は第3条に定める事業に従事するとともに、これに関連する業務を行う。

2 専門職員は館長の推薦を受け、学長が任命する。

3 専門職員は博物館学芸員の資格を有するものとし、該当者がいない場合は博物館学芸員に相当するものとする。

4 専門職員の任期は3年とし、再任を妨げない。

(運営委員会)

第7条 博物館の管理運営に必要な事項を審議するため、博物館運営委員会(以下「委員会」という。)を置く。

(委員会・構成)

第8条 委員会は、次の者をもって構成し、学長が委嘱する。

- (1) 館長
- (2) 専門職員
- (3) 学部長から2名
- (4) 研究所長から2名
- (5) 博物館学芸員関係学識経験者から1名
- (6) 考古学および文化史関係学識経験者から1名
- (7) 自然誌関係学識経験者から1名

2 館長の推薦により、前項に定める委員のほか、学識経験者若干名を加えることができる。なお、学識経験者委員の委嘱は学長が行う。

3 委員会が必要と認めたときは、委員以外の者に出席を求め、意見を聴くことができる。

(委員の任期)

第9条 前条第1項第3号乃至第6号および第2項の委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

2 任期中に欠員が生じた場合は、委員を補充し、任期は前任者の残任期間とする。

(委員会の運営)

第10条 委員会は、館長が招集し、議長となる。

2 委員会は、委員の過半数の出席をもって成立し、議事は出席委員の過半数の同意をもって決する。

(委員会の審議事項)

第 11 条 委員会は、以下の事項について審議する。

- (1) 資料等の収集、整理、保管、展示および公開に関する事項
- (2) 博物館の管理運営に関する事項
- (3) 調査研究活動ならびにその成果の発表および出版に関する事項
- (4) 博物館関係科目、その他関連授業科目の教育活動への協力に関する事項
- (5) 博物館の予算・決算に関する事項
- (6) その他必要な事業に関する事項

(細則)

第 12 条 この規程に定めるもののほか、管理運営上必要な事項は、立正大学博物館細則によるものとする。

(規程の改廃)

第 13 条 本規程の改廃は委員会および全学協議会の議を経て、学長が決定する。

2 前項に規定するもののほか、この規程の改廃の最終決定は、立正大学学園規約類の制定に関する規程第 6 条の規定による。

附 則

この規程は平成 14 年 4 月 1 日から施行する。

平成 28 年 2 月 24 日改正、平成 28 年 4 月 1 日施行

4. 立正大学博物館細則

(趣旨)

第 1 条 この細則は立正大学博物館規程第 12 条の規定に基づき、同規程の施行について必要な事項を定めるものとする。

(開館日)

第 2 条 立正大学博物館（以下「博物館」という。）の開館日は原則として立正大学学則第 31 条に定める休業日および火曜日を除く日とする。

(開館時間)

第 3 条 博物館の開館時間は、午前 10 時から午後 4 時までとする。

(入館手続)

第 4 条 博物館に入館する者は所定の手続をとらなければならない。

2 館長は博物館における教育および研究活動に支障があると認める場合は、入館を許可しないことがある。

(入館料)

第 5 条 博物館の入館料は原則として無料とする。

(入館者の義務)

第 6 条 入館者は博物館の施設・資料等を毀損し、または滅失したときは、直ちに館長に届け出て、その指示に従わなければならない。

2 入館者は前項の規定にある損害に対し損害賠償の義務を負わなければならない。ただし、事情によりこれを免除または軽減することができる。

(資料等の利用)

第 7 条 博物館内において撮影、実測、特殊観察、複製製作等の目的で資料等の利用を希望する者は、館内利用許可申請書（様式 1）を館長に提出し、その許可を受けなければならない。

2 資料の所蔵者および寄託者が学外にある場合は、当該資料の利用を希望する者は事前に所蔵者または寄託者の承認を受け、それを証明する書類を館内利用許可申請書に添付しなければならない。

3 利用を許可された者は次に掲げる事項を遵守しなければならない。

(1) 利用に際しては博物館の専門職員の指示に従うこと。

(2) 利用による成果を刊行物、映画フィルム、ビデオテープ等に発表したときは、本博物館の名称およびその所蔵、または保管である旨を明記すること。

(3) 利用により生じた著作物等は利用許可申請書に記載の目的以外には使用しないこと。

(4) 館長は、第 1 項の利用許可申請書の提出があったときは、審査のうえ館内利用許可書（様式 2）を交付する。ただし、重要文化財およびこれに準ずる資料等については、立正大学博物館運営委員会（以下「委員会」という。）の議を経なければならない。なお、館長は管理上支障があると判断した場合は、許可を取り消すことができる。

(5) 第 1 項による利用許可を受けた者が、当該資料等を毀損した場合は、損害賠償の義務を負わなければならない。

(資料等の利用料金)

第 8 条 前条第 3 項により許可を受けた者は、別に定める利用料金を速やかに経理部に納入しなければならない。

2 館長は、前項の定めにかかわらず次の各号のいずれかに該当する場合は、利用料金を全額免除することができる。

(1) 各種教育機関や国または地方公共団体および公益法人が行う教育、学術および文化等に関する事業

(2) 博物館法（昭和 26 年法律第 285 号）に規定する博物館等の行う事業

(3) 学術研究

(4) 前号のほか、館長が全額免除すべき特別の理由があると認めたとき。

3 前項の定めにより利用料金を全額免除された者は、利用により生じた著作物 1 部以上を無償で博物館に納入しなければならない。ただし、館長が認めたときはこの限りでない。

(資料等の貸出)

第 9 条 資料等の貸出を受けようとする者は館外貸出許可申請書（様式 3）を館長に提出し、その許可を受けなければならない。

2 館長は前項の館外貸出許可申請書の提出があったときは、審査のうえ館外貸出許可書（様式 4）を交付する。ただし、重要文化財およびこれに準ずる資料等については、委員会の議を経て決定しなければならない。

3 館長は管理上支障があると認められる場合は、前項の許可を取り消すことができる。

4 第 1 項による許可を受けた者は、貸出期間中に当該資料等を毀損または滅失した場合は、損害賠償の義務を負わなければならない。

(資料等の貸出料金)

第 10 条 前条第 2 項による許可を受けた者は、別に定める料金を速やかに経理部に納入するとともに、貸出期間中および貸出に伴うすべての経費を負担するも

のとする。

2 前項の定めにかかわらず、第 8 条第 2 項第 1 号、第 2 号および第 4 号のいずれかに該当する場合は料金を全額免除する。

3 前項の定めにより貸出利用料金を全額免除された者は、利用により生じた著作物を 1 部以上、博物館に寄贈しなければならない。ただし、館長が特に認めたときはこの限りでない。

(寄託)

第 11 条 資料等を寄贈・寄託しようとする者は、その品目、点数、期間等を寄贈申請書（様式 5）寄託申込書（様式 6）に記入のうえ、館長に提出するものとする。

2 館長は前項に定める寄贈・寄託の申出があった時は、委員会の審議に附し、受入の承認がなされたものについて、学長に意見書を提出しなければならない。

3 館長は寄贈・寄託を受けた時は、寄贈・寄託者に対して当該資料の受領証（様式 7）・受託証（様式 8）を交付するものとする。

4 館長は寄託を受けた資料等について十分な注意をもって保管しなければならない。

(細則の改廃)

第 12 条 本細則の改廃は、委員会および全学協議会の議を経るものとする。

附 則

1 この細則に定めのない事項については、館長がその都度、委員会に諮り処理する。

2 この細則は平成 14 年 4 月 1 日から施行する。この細則は平成 15 年 4 月 1 日から施行する。

(申請書様式一覧)

様式 1：館内利用許可申請書

様式 2：館内利用許可書

様式 3：館外貸出許可申請書

様式 4：館外貸出許可書

様式 5：博物館資料寄贈申請書

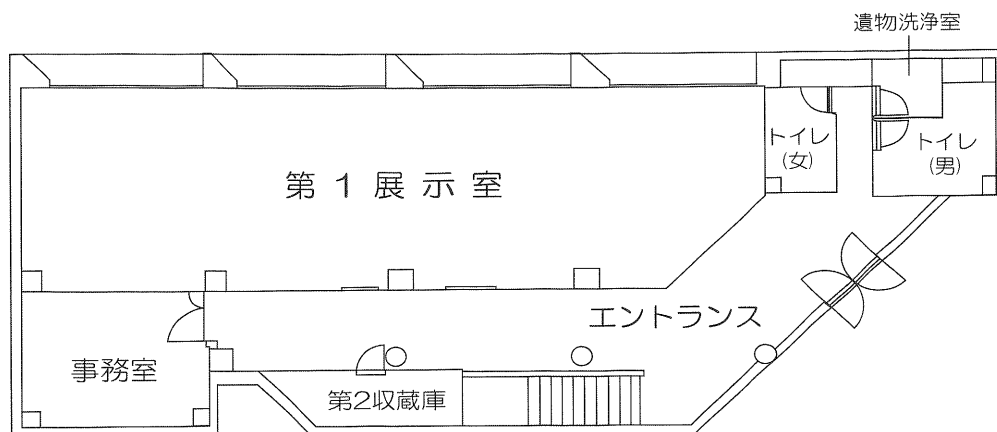
様式 6：博物館資料寄託申請書

様式 7：博物館資料受領証

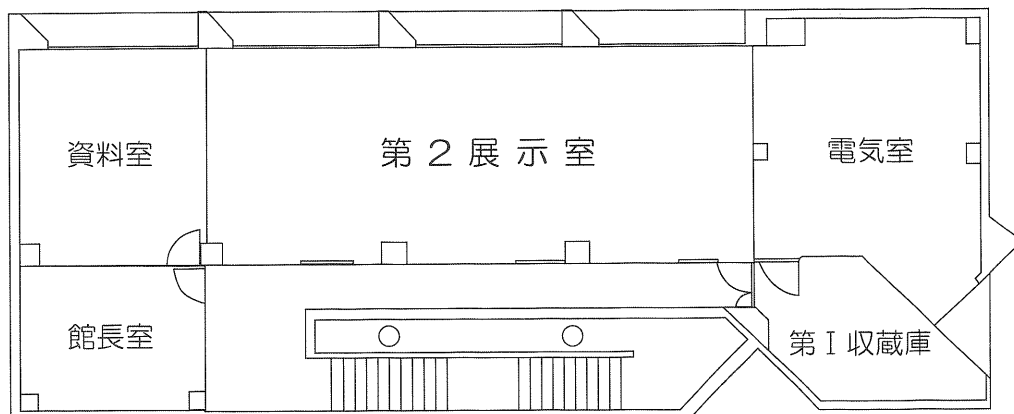
様式 8：博物館資料受託証

様式 9：博物館資料借用書

5. 施 設



1階 平面図



2階 平面図

- 建物
 - 所在地・・・埼玉県熊谷市万吉 1700
 - 建築面積・・・376.8㎡
 - 構造・・・鉄筋コンクリート造 2階建

●各室面積一覧

(1階)

第1展示室	・・・93.88㎡
事務室	・・・17.10㎡
第2収蔵庫	・・・3.22㎡
トイレ	・・・11.01㎡
遺物洗浄室	・・・2.26㎡
エントランス	・・・45.64㎡

(2階)

第2展示室	・・・71.22㎡
館長室	・・・16.98㎡
資料室	・・・23.89㎡
第1収蔵庫	・・・12.30㎡
電気室	・・・39.00㎡

●各室仕様

(第1展示室・事務室)

床	・・・タイルカーペット敷
壁	・・・ビニールクロス貼り
天井	・・・ミネラートン

(第2展示室)

床	・・・タイルカーペット敷
壁	・・・ビニールクロス貼り
天井	・・・ミネラートン

(館長室・資料室)

床	・・・タイルカーペット敷
壁	・・・ビニールクロス貼り
天井	・・・ジブトーン

●電気設備

受電設備	・・・6.6KV
変圧器設備	・・・電灯ー100KVA 動力ー80KVA
照明設備	・・・展示室ーハロゲンランプ使用 館長室・事務室・資料室ー蛍光灯使用

●防犯・防災設備

防犯設備	・・・各室熱センサー取付、非常通報設備
ITV設備	・・・CCDカメラ4台、展示室等監視
自動火災報知設備	・・・P型1級5回線
消火設備	・・・粉末消火器9台

●空調設備

空調機	・・・空冷式、パッケージエアコン(個別)
-----	----------------------

●給排水設備

給水設備	・・・市水道使用
給湯設備	・・・貯湯式電気湯沸器

II 事業報告

1. 運営委員会

令和2年度は、新型コロナウイルス感染症拡大により対面による会議の開催が困難となったため、メール審議とした。

①運営委員会（定例）

・日 時：メール審議

令和元年7月9日付で各委員に「令和2年度立正大学博物館運営委員会の開催について」の文書を送り、7月30日（木）正午までに審議内容について回答いただいた。

議 事

I. 報告事項

1. 令和2年度博物館運営委員について
2. 平成31・令和元年度博物館事業報告及び決算報告について
3. その他

II. 審議事項

1. 令和2年度事業計画について
2. 令和2年度予算について
3. その他

I-1

令和元年度で運営委員の任期（2年）が満了となったため、5名の方に新たに委員をお願いした。

令和2年度立正大学博物館運営委員

第1号委員 時枝 務（博物館長）

第2号委員 足立佳代（学芸員）

第3号委員 ○板野晴子（社会福祉学部長）

第3号委員 鈴木厚志（地球環境科学部長）

第4号委員 ○川眞田嘉壽子（法制研究所長）

第4号委員 ○村尾泰弘（社会福祉研究所長）

第5号委員 ○久保真紀子（博物館関係学識経験者）

第6号委員 石山秀和（文化史関係学識経験者）

第7号委員○島津 弘（自然史関係学識経験者）

*敬称略（○は新任委員）

*審議事項については異議なく承認された。

・決算報告に関して、予算残額の範囲内で、バス通り沿いに博物館の案内や企画展の掲示を行う掲示板等を設置してほしいとの意見があった。

（回答）決算残額のうち、特に額が大きい人件費・兼務職員については、昨年度、事務職アルバイトが雇用契約の問題から10月からの半年勤務であったこと、人件費を物件費に流用できないため、残額が生じた。

II-1

・オンラインミュージアムの開設について、具体的な方法について質問があった。

（回答）展示室内の様子を画像や動画で紹介する方法を検討している。

II-2

・未消化の予算が出るようであれば、懸案の掲示板設置を検討してほしい旨要望があった。

（回答）今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、館内にカビが発生している。現在その対応により、除湿機・空気清浄機の設置や専門業者による館内清掃等検討しており、今年度の掲示板設置は難しく、来年度以降設置できるよう、関係各所と調整する。

II-3

・海外からの来訪者向けに外国語での解説や音声ガイドの充実等を実施してほしいとの意見があった。

（回答）令和2年度に現在配布しているリーフレットの英訳をできるよう準備したい。

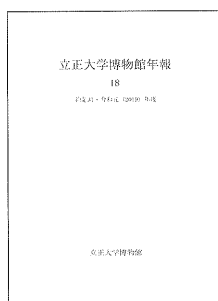
2. 開館日数・入館者数

今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大対策により、休館となった。

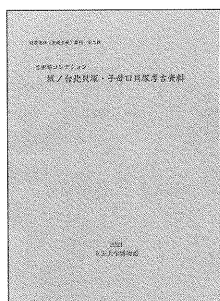
3. 出版

令和2年度は、以下の出版物を刊行した。

- ・『立正大学博物館年報』18号
- ・館報 万吉だより 31号・32号
- ・第15回特別展図録『立正の考古学』
- ・館蔵資料基礎文献叢刊第9輯『吉田 格コレクション 城ノ台北貝塚・子母口貝塚考古資料』



B5判 28頁



B5判 100頁

4. 資料活用

(1) 館外利用

次の機関に所蔵資料の写真を貸出し及び掲載を許可した。

① 港区

『港区史』に掲載

貸出資料：人物埴輪頭部（伝芝丸山古墳）写真
掲載許可

刊行日：令和2年10月

② 大田区立郷土博物館

常設展示のパネル及び情報検索システム「大田歴史探検ガイド」に掲載

貸出資料：多摩川台古墳群写真3点下沼部貝塚写真（吉田コレクション）1点貸出し

掲載日：2021年4月1日から

③ 第一学習社

文部科学省検定高等学校地理歴史科「日本史探



称名寺Ⅰ式深鉢



称名寺B貝塚発掘状況

求」教科書紙面への掲載および教師用資料、デジタル教科書への利用

貸出資料：称名寺Ⅰ式深鉢（吉田コレクション）
写真1点

掲載日：2023年2月刊行（予定）

④ 横浜市ふるさと財団埋蔵文化財センター

広報紙『埋文よこはま』43号掲載及び横浜の遺跡展「野島貝塚」パネル掲載

掲載許可資料：野島貝塚出土釣針・土器片の写真2点

掲載日：2021年3月5日～4月27日展示

2021年3月刊行

⑤ 袖ヶ浦市教育委員会

『令和元年度山野貝塚講演会周辺地域の遺跡から山野貝塚の特徴を探る記録集』に掲載

貸出資料：称名寺貝塚写真（吉田コレクション）
3点貸出し、写真7点掲載許可

掲載日：2021年3月刊行

⑥ 矢内 雅之氏

「武蔵国分寺跡出土瓦の胎土分析」

『アーキオクレイオ』第18号に掲載

掲載許可資料：新久窯跡出土瓦等36点

写真、実測図、拓本、科学分析資料

刊行日：令和3年3月

(2) 館内利用

個人による資料調査が2件あった。

- ・新沼窯跡出土の文字瓦の調査
- ・花輪台貝塚出土土製品の調査

5. 展 示

(1) 常設展示

—第1展示室(1F)—

眞鍋孝志氏(日本古鐘研究会会長)より寄贈された撫石庵コレクションおよび立正大学考古学研究室が1958年～1980年にかけて文部省(現文部科学省)の科学研究費の交付などを受けて実施した「古代窯業の考古学的研究」によって発掘された資料を中心に展示している。

撫石庵コレクションは、アジアの梵音具を中心とした資料で、とくに伝櫃原市出土の梵鐘は、わが国の初現期の梵鐘として十指に入るもので、極めて貴重な資料である。この伝櫃原市出土鐘を復元した鐘が新たに寄贈され、実際に撞いて音を聴くことができる資料である。

この他に、旧石器時代の資料として北海道白滝遺跡・報徳遺跡、神奈川県朝日遺跡の出土品、

縄文時代では埼玉県石神貝塚、古墳時代では熊谷市所在野原古墳群の出土資料、伝芝丸山古墳出土人物埴輪(頭部)等を展示している。

古代から近世にかけては、千葉県九十九坊廃寺・長熊廃寺跡出土品、神奈川県下出土火葬骨蔵器等を展示しているほか、平成 年に寄贈された仙場右羊コレクションである中国古代瓦を展示している。

エントランスでは、撫石庵コレクションの日本をはじめ朝鮮半島・中国・タイ・ミャンマー・スリランカなどアジア各地の梵音具や熊谷キャンパスにおける施設の新築などに際して、文化財保護法によって定められた遺跡の発掘調査で出土した資料を展示している。

また、天正8(1580)年創立の飯高壇林に淵源が求められる立正大学の歴史をパネルで紹介している。



撫石庵コレクション



「古代窯業の考古学的研究」資料



白滝遺跡・石神貝塚・野原古墳群等



エントランス展示

—第2展示室(2F)—

吉田格コレクション、樺太出土資料、海外発掘調査資料を展示している。

吉田格コレクションは、吉田 格氏(立正大学専門部地歴科・昭和16(1941)年卒・平成18年没)寄贈のコレクションである。吉田氏は縄文文化研究者として著名であり、とくに縄文時代早期の花輪台式土器、後期の称名寺式土器は吉田氏によって設定された型式標準資料として学界に周知されている。

とくに称名寺貝塚出土の土器・石器・骨角器および骨角器原料(鹿角)は縄文文化の研究上、きわめて重要な資料である。

また、本草学者・伊藤圭介(日本最初の理学博士)蒐集の石器は『日本産物誌』明治9(1876)年に収められているものであり、嘉永5(1852)年の箱書きを持つ収蔵箱に収納されている石器とともに、極めて貴重な資料として吉田コレクションに収められている。



吉田コレクション：称名寺貝塚資料

樺太出土資料は、久保常晴氏(元本学名誉教授)寄贈のコレクションで、同氏が1930年代に樺太の地を踏査された際に収集されたものである。樺太出土資料は、現在、日本各地に所蔵されているが、その一つとして立正大学所蔵品の存在が知られている。

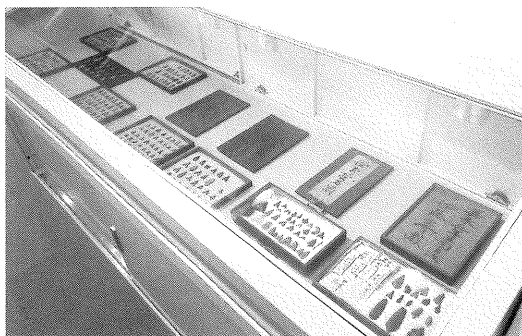
海外発掘調査資料は、1967年～1977年にかけて、立正大学がネパール王国に派遣した発掘調査団によって発掘されたティラウラコット遺跡の出土資料群であり、とくに日・ネ親善のためネパール考古局より寄贈された資料である。

ティラウラコット遺跡は、釈尊出家の故城—カピラ城跡の有力な比定遺跡として注目されている。

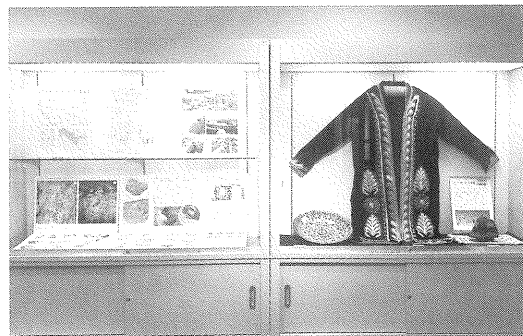
2014年から立正大学では、ウズベキスタン学術調査隊を派遣し、仏教遺跡カラ・テペ、仏塔ズルマラ周辺の発掘調査を行っている。その調査成果の一部とウズベキスタン共和国との交流の様子を展示している。



海外調査：ティラウラコット遺跡調査資料



吉田コレクション：伊藤圭介資料



海外調査：ウズベキスタン調査資料

(2) 特別展示

◆第15回特別展「立正の考古学」

・会期:令和2年3月15日(月)から3月30日(月)(令和2年度が新型コロナウイルス感染症対策により休館となったため、令和3年度に継続して展示する)

・主な展示資料:

久保常晴先生『佛教考古学研究』原稿

古代窯業遺跡調査資料

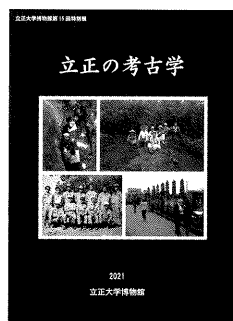
朝日遺跡(箱根町)出土石器(旧石器時代)

久ヶ原遺跡(大田区)出土弥生土器

石神貝塚(川口市)出土土偶・貝製品

野原古墳群出土須恵器

・内容:立正大学の考古学は、昭和5(1930)年の「考古学懇談会」の発足が淵源で、2020年で90年になりました。これを記念し、これまでの立正大学における考古学研究を顧みて、その成果や研究史を展示するものです。



展示図録 B5版



特別展 展示状況

6. 教育普及

(1) 博物館館務実習

今年度も博物館学芸員資格取得のための館務実習生を受け入れた。実習生は、文学部史学科2名、哲学科2名、仏教学部仏教学科1名の計5名であった。



令和2年度実習生

実習期間:9月9日(水)~10日(木)、15日(火)~17日(木)(延べ5日間)

◆1日目 9月9日(水)

・実習ガイダンス

・立正大学博物館の概要

・資料整理の実習

学芸員 足立佳代

立正博物館所蔵の絵馬の資料整理を行った。所定の絵馬調査カードに必要事項を記入し、絵馬の両面の写真を撮影、カードに貼り、カードを完成させた。



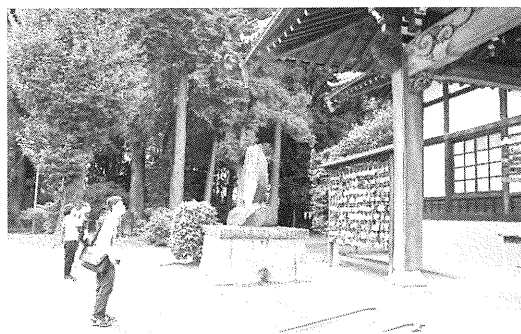
写真撮影・カード作成の様子

◆ 2 日目 9 月 10 日（木）

- ・ 博物館学芸員の職務と心構えについての講義
館 長 時枝 務
 - ・ 資料整理の実習
学芸員 足立佳代
 - ・ 野外実習 文殊寺見学
学芸員 足立佳代
- 館長による講義、絵馬の奉納例を確認するため、隣接する文殊寺で野外調査を行った。資料整理では、展示するための資料の選定や展示方法について話しあった。



館長による講義

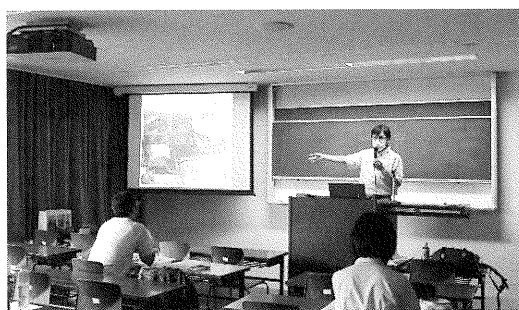


文殊寺での野外調査

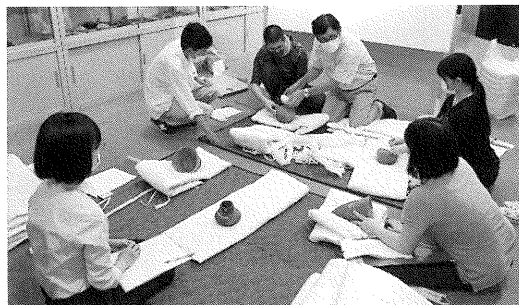
◆ 3 日目 9 月 15 日（火）

講師 井上尚明氏（立正大学非常勤講師）

- ・ 文化史と博物館展示についての講義
 - ・ 資料の取り扱い及び梱包についての実習
- 考古資料を使って、資料の取扱い、検品調書の書き方、梱包方法などの実習を行った。



文化史についての講義

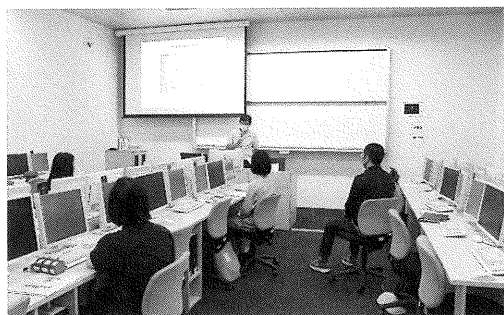


考古資料の取扱いと資料の梱包

◆ 4 日目 9 月 16 日（水）

講師 井上尚明氏（立正大学非常勤講師）

- ・ 展示解説・キャプション・リーフレット作成実習
- 展示内容について話し合いながら、パソコンを使って展示解説、キャプションなどを作成した。



博物館での展示についての講義

◆ 5 日目 9 月 17 日（木）

足立学芸員

- ・ 資料展示実習

第1展示室のパネルと壁面に絵馬の展示を行った。各自リーフレットも作成し、展示した。

展示完了後、博物館職員に展示内容や展示で

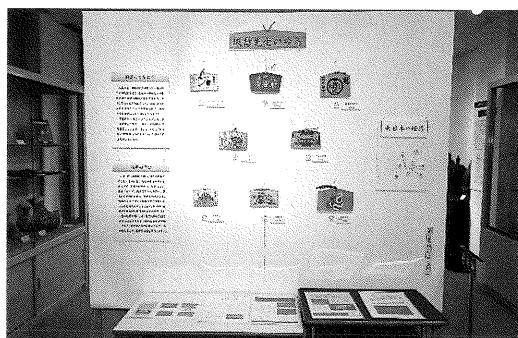
工夫した点などを説明し、質問を受けた。

新型コロナウイルス感染対策をしながらの実習で、例年より短い期間であったが、資料の整

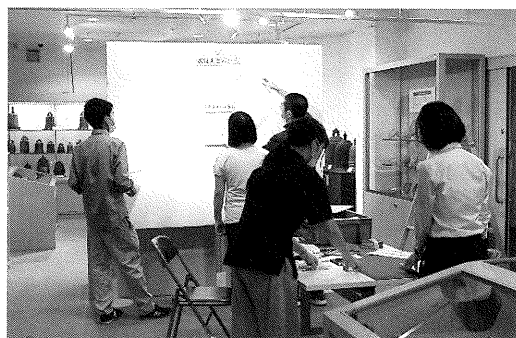
理から展示までを通して作業することができた。実習生は初めての作業に戸惑いながらであったが、助けあい、展示を完成させた。



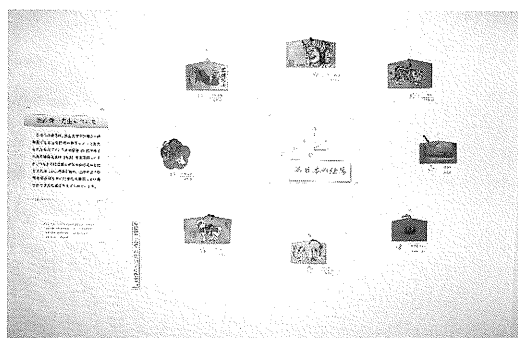
展示解説の作成



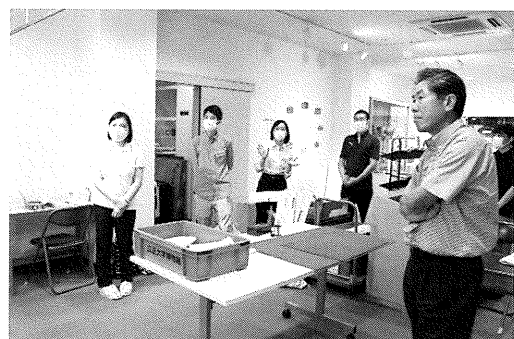
展示状況



パネルへの展示



展示状況



展示についての説明



作成したリーフレット

(2) 土器焼き実習

12月25日(金)、26日(土)の2日間にわたり、竹花宏之先生(史学科非常勤講師)による考古学実習5・6(品川・集中)により作成した土器を焼く実習が実施された。

実習生は3年生と4年生13名のうち、9名が参加した。実習の場所は、熊谷キャンパスゴルフ練習場東側の空地である。

例年は、11月上旬の実施であるが、今年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、対面による実習が遅れたため、12月となった。本学非常勤講師である中山晋先生、井上尚明先生も見学にみえた。

1日目は午前10時に博物館に集合し、まずは博物館の見学を行った。その後、倉庫から道具や資材の運搬などの準備をした。午後1時に空地に集まり、焼成用の穴を掘る班と薪を拾い集め、角材を切る班とわかれ作業を行った。焼成用の穴掘削は午後4時前に終了した。穴には霜よけのシートを掛け、1日目の作業を終了し

た。

2日目は現地に9時に集合し、穴の中で薪を燃やし始めた。昼前まで穴を暖めて乾燥させるため、薪を燃やし続け、あわせて土器を乾燥させた。昼過ぎに一旦火が収まったところで土器を穴に入れ、しばらくしてから角材を投入し、徐々に火力を上げていった。土器を焼き始めて30分くらいで攻め焚きをし、表面の炭を消した。火が落ち着いたらオキの中の土器をムラのないように移動させる。最後に焚き火の中から土器を取上げ、ゆっくりと冷ます。

1日目は風が強く実施が危ぶまれたが、2日目は風も止み、穏やかな日となった。また、土が冷えているため、燃焼温度が十分に上がるか心配したが、土器が割れることもなく、うまく焼くことができた。

平成22年度から10年にわたって熊谷キャンパスで実施した土器焼き実習であるが、担当の竹花宏之先生が今年度をもって退職されることとなり、本年度で一旦終了となった。



令和元年度実習生

【土器焼きの工程】



①直径 2m ほどの浅い焼成用の穴を掘る



②薪を拾い集める



③角材を適当な大きさに割る



④穴で薪を燃やし、暖め、乾燥させる



⑤穴の周りに土器を並べ、ゆっくり乾燥させる



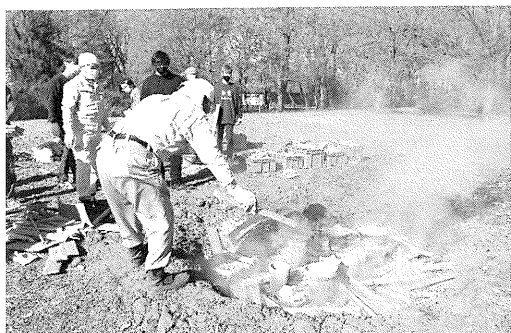
⑥土器の底を暖める



⑦火が収まったら、炭の周りに土器を並べる



⑧炭の中央に土器を移動する



⑨土器の周りに薪をくべる



⑩薪をくべながら、徐々に火力を上げる



⑪火力が落ちないように見守りながら薪をくべる



⑫火の温度を上げ、土器に付着した炭を消す



⑬ゆっくりと火を弱める



⑭オキの中の土器をムラの無いよう移動する



⑮焼きあがった土器を取上げる



⑯ゆっくりと土器を冷ます

7. 調査・研究

(1) 吉田 格コレクション 城ノ台北貝塚及び子母口貝塚の資料整理

当館の主たる収蔵・展示資料の一つである吉田格コレクションのうち、城ノ台北貝塚及び子母口貝塚について、縄文時代の研究者である金子直行氏と上野真由美氏の協力により資料整理を行った。

城ノ台北貝塚は、千葉県香取市小見川に所在する縄文時代早期の貝塚である。昭和24(1949)年11月と昭和25(1950)年10月に吉田格、岡本勇、北詰栄男、市川規平、岩月康典等、および佐原高等学校歴史部生徒とともに発掘調査を行った。この時の調査で、昭和18(1943)年に東京大学理学部人類学教室によって発掘されていた台地の南側が城ノ台南貝塚、吉田らが調査した北側が城ノ台北貝塚として呼称されたようである。

調査成果については、「千葉県城ノ台貝塚」『日本考古学協会第5回総会研究発表要旨』(昭和25年)、「千葉県城ノ台貝塚」『石器時代』第1号(昭和30年)に報告されているが、全容については整理、調査が進んでいない状態であった。

今回の資料整理では、土器総数6083点を撚糸文土器、押型文土器、田戸下層式土器、田戸上層式土器、第5類土器、無文土器に分類後、第Ⅰ群土器、第Ⅱ群土器、第Ⅲ群土器、第Ⅳ群土器、第Ⅴ群土器、第Ⅵ群土器、第Ⅶ群土器、第Ⅷ群土器、第Ⅸ群土器に分類し、解説した。図化した土器は362点、土製品2点、石器10点である。

子母口貝塚は、神奈川県川崎市に所在する貝塚で、縄文時代早期の子母口式土器の標識遺跡である。昭和16(1941)年に川崎市史編さん事業の一環として調査が行われているが、戦災で資料が失われた。その後、昭和22(1947)年に吉田によって貝塚の一部が発掘調査された。

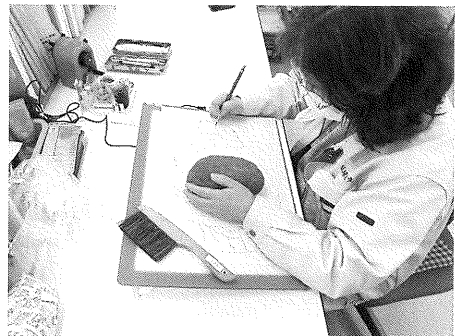
今回の資料整理で、土器6点、石器5点、骨角器2点について実測し、解説した。

調査成果は、館蔵資料「基礎文献」叢刊 第9輯『吉田コレクション 城ノ台北貝塚・子母口貝塚考古資料』として報告した。

調査成果は、館蔵資料「基礎文献」叢刊 第9輯『吉田コレクション 城ノ台北貝塚・子母口貝塚考古資料』として報告した。



土器を分類する様子



石器を実測する様子

立正大学博物館所蔵の

下沼部遺跡出土弥生土器について

元大田区立郷土博物館主査学芸員

野本 孝明

長井文化財技術研究所

安井千栄子

はじめに

2017（平成 29）年 1 月～3 月にかけて大田区立郷土博物館で開催された、平成 28 年度特別展『土器から見た大田区の弥生時代—久ヶ原遺跡発見、90 年—』（大田博 2017）において、展示写真パネルの下沼部遺跡（展示パネルでは「貝塚」⁽¹⁾）の弥生土器についてその口縁部に少なからず違和感⁽²⁾を覚えた。

そこで、2018（平成 30）年 7 月立正大学博物館（以下立正博）へ下沼部遺跡出土の弥生壺形土器（以下、下沼部弥生土器）の実測を許可申請することにした。8 月 3 日その許可が得られたので、所蔵先である熊谷万吉校舎にある立正博へ出向き、一階展示室に展示されている下沼部弥生土器を実測することにし、その実測は安井千栄子が担当した。

この土器は森本六爾が実測してから 80 年以上経過しており、それにも関わらず南関東後期弥生土器の初頭～前葉という時期で周知されている。森本六爾の実測図（以下森本実測図）と大田区立郷土博物館（以下大田博）の展示写真パネルの下沼部弥生土器を比較検討するため、立正博所蔵の下沼部弥生土器を実測し、立正博所蔵下沼部弥生土器の複合山形文（森本・小林 1938・39a）、所謂菱形文を菊池義次が実践した山内清男の縄文土器の文様帯分析型式学を再評価する安藤広道の久ヶ原Ⅰ～Ⅲ式に位置づけたい。（野本）

Ⅰ．立正博へ所蔵の経緯

今回報告する下沼部弥生土器の立正博所蔵の経緯は、戦後の品川キャンパス校舎（当時大崎キャンパス）にあった史学科標本室・考古学資料室（2016a 坂詰）にあったものとされている。この土器がいつ発掘・採集され、考古学資料室に展示されたかは、当時大崎キャンパスが戦災により考古学資料室も混乱の中で戦前の展示機能を失ってしまったため、不明である。戦後、品川キャンパスの考古学資料室所蔵品と熊谷万吉校舎建設に伴う発掘調査で出土した資料は、熊谷キャンパスの考古学陳列室に収められ、立正大学博物館の開設に伴いこれらの考古学資料は博物館に収蔵・展示されている。

下沼部弥生土器が戦前の立正大学考古学会学生（以下立正大考古学会学生）により史学科標本室・考古学資料室に収蔵・展示されたことは、『銅鐸（全）』（立正大考古学会 1968）の全会収蔵目録（二）によれば下沼部貝塚⁽³⁾（大田区教委 2009）ほか都内外近郊で採集された土器・石器を史学科標本室・考古学資料室へ収蔵・展示していたことが確認できる。しかしながら、この土器がいつ頃発掘・採集されたかは全会収蔵品目録では確認できない。

では、いつ誰が下沼部遺跡⁽⁴⁾の場所で下沼部弥生土器を発掘・採集したのだろうか。「立正大学博物館 15 年のあゆみ」（立正博 2016）によると、昭和 7 年考古学標本室（坂詰秀一 2016b）が開設されていることから、それまでには立正大考古学会学生が都内外近郊で採集した土器・石器等を史学科標本室・考古学資料室に収蔵・展示したものと思われる。その発掘・採集遺跡は、昭和 2 年に始まる久ヶ原台地の耕地整理の時期と立正大考古学会学生が盛んに活動された頃と森本六爾がパリ留学（浅田芳朗 1982）から帰朝後の 1933（昭和 8）年 10 月の久ヶ原遺跡の調査と重なるとと思われる。

久ヶ原遺跡の正式発掘調査（野本 1999b）は 1932（昭和 7）年 7 月 14 日が最初で、その後 1933（昭和 8）年 10 月 22・28・29 日には森本六爾・菊池義次等が発掘調査に参加している。この発掘調査は 1938（昭和 13）年 9 月 18・19 日まで山内清男・菊池義次等によって数回実施されている。この間立正大考古学会学生等も発掘調査に参加している。森本六爾は久ヶ原遺跡の発掘調査には 1933（昭和 8）年 12 月 10 日までで参加し、立正大考古学会学生と共に久ヶ原遺跡を発掘調査を行ったことから、当時の大崎キャンパスの立正大学史学科標本室・考古学資料室を訪ねて立正大考古学会学生の発掘・採集した下沼部遺跡（当時貝塚）の弥生壺形土器等を見て、彌生式土器聚成圖録正編（以下聚成圖録）M2（第 3 図 4）と M41（第 3 図 3）を掲載するべく折返し口縁壺形土器 M2 と単口縁壺形土器 M41 を実測したことは十分に在り得ることと思われる。

さて、立正博所蔵の下沼部弥生土器は、森本六爾が実測した聚成圖録 M2 の特徴である折返し口縁壺形土器（聚成圖録 1938・39b 森本・小林）と異なり、頸部以下の文様帯とその形態は類似するが、口縁部が単口縁のため明らかに新資料と思われる。ではなぜ同じ複合山形文、所謂菱形文様と頸部以下胴部が極端に下膨れする算盤形の二つの壺形土器のうち、立正博所蔵下沼部弥生土器の単口縁ではなくラッパ状に開くお折返し口縁の聚成圖録 M2 を、森本六爾は選択・実測したのだろうか。おそらく壺の形態が見劣りする立正博所蔵下沼部弥生土器の単口縁よりも見栄えするラッパ状に開く折返し口縁の聚成圖録 M2 を聚成圖録（森本・小林 1938・39）に掲載したものと思われる。それと同時に聚成圖録には M41（第 3 図 3）単口縁の無文下沼部遺跡壺形土器も掲載された。つまり、後述するが今回報告する下沼部弥生土器は立正大考古学会

学生が発掘・採集・公開されていない新資料ということである。（野本）

II. 実測の成果

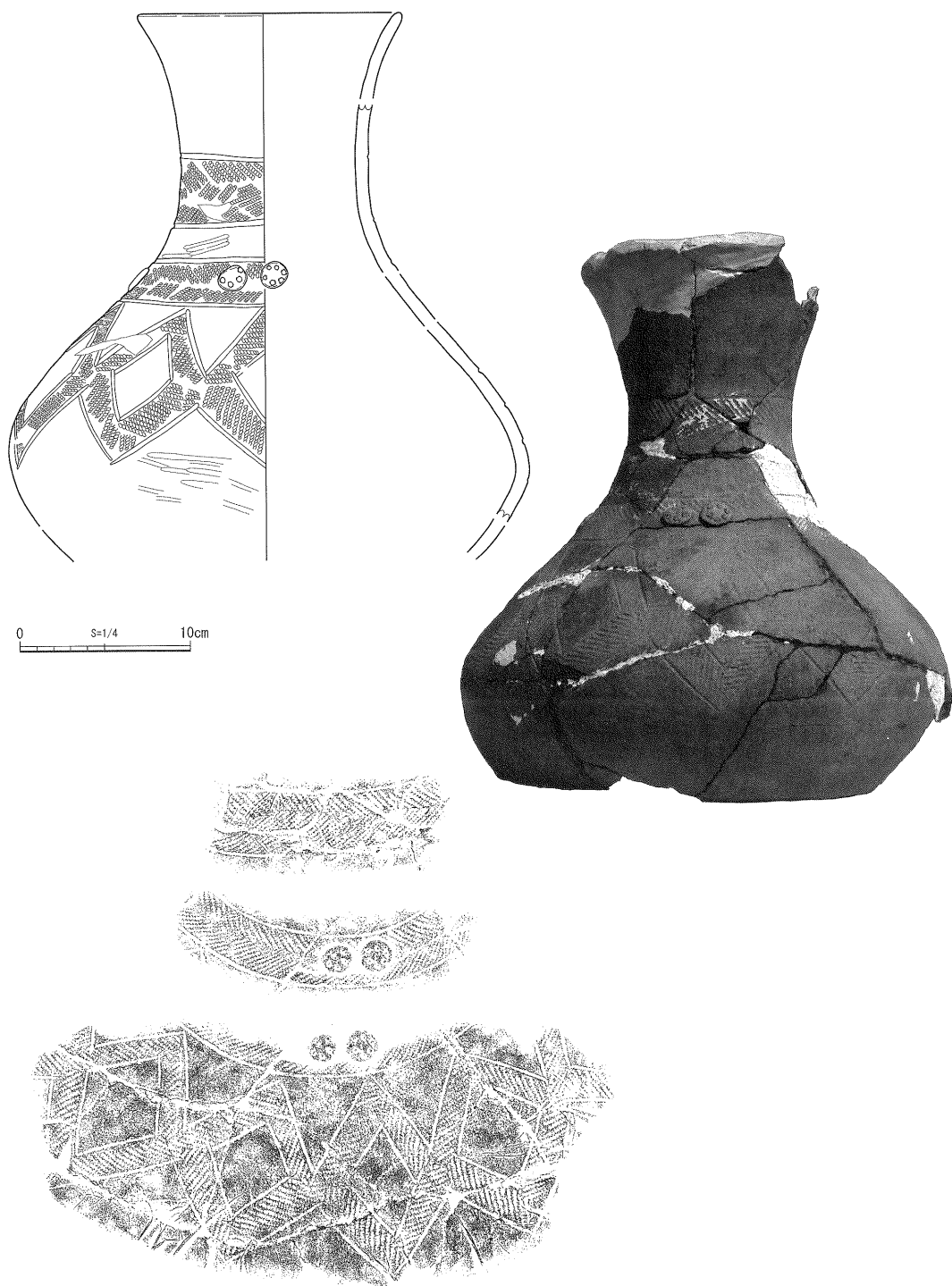
第 1 図の壺形土器は胴部下半より下を欠き、口径 14.5 cm（残存高 32.4 cm）底部除く、頸部径約 10 cm、胴部最大径約 29.5 cm を測る。口縁部は頸部断面が丸い単口縁で、頸部はやや太く、胴部中位より下半に最大径をもつ算盤形を呈する。文様は頸部～胴部下半に施され、頸部と胴部下半には単節縄文 RL と LR を用いた羽状縄文を沈線で区画する横帯は無文帯を挟み 2 段もつ。2 段目には 2 点一組の多孔円形浮文（刺突 5～6 個）が 3 ヲ所付けられる。その下には単節縄文 RL を地文にもつ菱形文を配する。縄文の縄目は粗い。沈線の幅は 1.5 mm、直線的なフリーハンドで山形文を上下に合わせる複合山形文の描き方である。無文部分は赤彩、ミガキ調整されている。

内面の調整は、摩滅や石膏でおおわれている部分が多いため詳細は不明である。僅かに観察できる箇所から、口縁部～頸部はミガキ調整、頸部にはヘラナデが施されていたと思われる。外面は赤褐色、内面はにぶい赤褐色を呈し、胎土は砂礫を多く含み、焼成は良好である。（安井）

III. 下沼部遺跡について

下沼部遺跡は 1976（昭和 51）年 9 月に日綿実業（株）のマンション建設に伴う緊急発掘調査で、縄文晩期と弥生中期末の住居跡が各々 1 軒発見された。弥生住居跡は半欠しており、一辺約 5.7 m の楕円方形プランで、住居周溝上から胴下半を欠く甕形土器（第 2 図左下）が出土し、砂岩性のぶ厚い片刃磨製石斧（第 2 図左下）も出土した（下沼部遺跡調査団 1980）。

この遺跡は、多摩丘陵と武蔵野台地の境を流れる多摩川下流域左岸の台地頂部、多摩川台か



第 1 図 立正大学博物館所蔵の下沼部遺跡出土の弥生壺形土器実測図と拓影図

ら延びた舌状台地東南斜面、大田区田園調布本町 37 番、下沼部貝塚（鳥居龍蔵 1893、江坂輝彌ほか 1939、吉田格・川崎義雄 1969）の東南斜面に位置し、標高約 20m に立地している（第 2 図 No. 48）。この地点は（第 2 図右下四角網掛け部分）下沼部貝塚の範囲内（大田区遺跡地図 No. 48 田園調布本町 35・37～42 番）に含まれるが、貝塚主体の遺跡ではなく集落遺跡なので、縄文後・晩期の貝塚と混同しないため遺跡として扱う。なお、下沼部遺跡を含む下沼部貝塚は、三菱重工のテニスコート付近から今回の調査地点南斜面に及ぶ（第 2 図右下楕円網掛け部分）。

主な周辺遺跡は、縄文早期の住居跡出土した桜橋付近遺跡（No. 110、戸田哲也 1996）、縄文前期の田園調布本町貝塚（No. 45、野本孝明 1992a）、縄文前期の亀塚付近・丸子多摩川園北貝塚（No. 1、酒詰仲男 1959）、弥生後期集落跡の丸山遺跡（No. 122、河合・野本 2001a）、古墳時代では前期の木炭塚を内部主体にもつ扇塚古墳（No. 145、河合・野本 2001b）、その北には多摩川台公園の北西端に前期の都史跡全長 97m の宝萊山古墳（No. 38、野本ほか 1998）東南端に全長 107m 余りの国史跡亀甲山古墳（No. 35、野本孝明 1992b）、これらの前方後円墳に挟まれる形で後期の都史跡多摩川台古墳群（前方後円墳 1 基＋円墳 7 基）（No. 26、大田区教育委員会 1986・1993）が分布する。その南には東急東横線で後円部が切られた全長 60m の後期の浅間神社古墳（No. 2、野本ほか 1992）、また、宝萊山古墳の北西に全長 38 m 余の観音塚古墳（No. 25、市原寿文 1953）、古墳時代後期の西岡 37 号墳（No. 36、西岡秀雄 1936）、古墳時代終末から多摩川台公園内に台地斜面に亀塚横穴墓群（No. 109、西岡秀雄 1936）多摩川台公園内横穴墓（No. 144、野本孝明 1982）が分布している。さらに周辺の台地斜面にも上沼部宝来横穴墓群

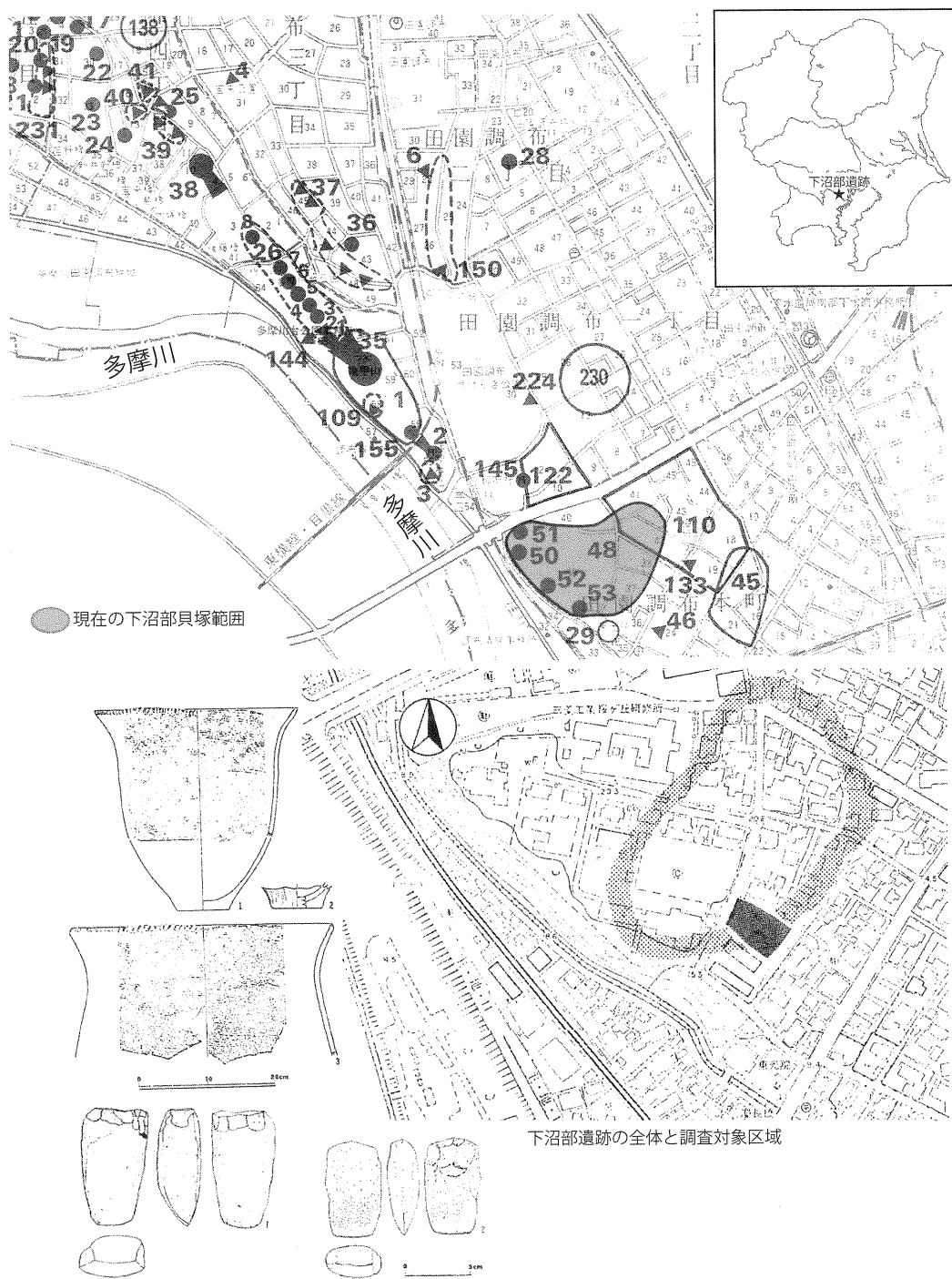
（No. 39、松崎元樹 2004）上沼部花野横穴墓群（No. 40、松崎元樹 2004）、下沼部汐見台横穴墓群（No. 37、松崎元樹 2004）、どりの坂横穴墓群（No. 150、松崎元樹 2004）、浅間神社付近横穴墓群（No. 3、松崎元樹 2004）、下沼部貝塚の台地上には西岡 49～52 号墳（No. 50～53、西岡秀雄 1936）が分布し、その東側に田園調布本町 24 番横穴墓（No. 46）、田園調布本町 26 番横穴墓（No. 47、松崎元樹 2004）、田園調布本町 19 番横穴墓（No. 133、松崎元樹 2004）が分布している。（野本）

IV. 弥生式土器聚成図録 M2 と立正博所蔵弥生土器の検討

立正博所蔵下沼部壺形土器（第 1 図）は口縁部が単口縁で、聚成図録 M2（第 3 図 4）の口縁部はラップ状に開く折返し口縁部で、口縁部が異なることが判明した。そこで、両者を詳細に検討することにした。

聚成図録 M2（第 3 図 4）は、胴部下半より下を欠き、口径 18.0 cm、総高約 39 cm 余り（底部推定復元値含む 42.5 cm）、頸部径約 7 cm、胴部最大径約 28.0 cm を測る。口縁部は極度に開くラップ型を呈する折返し口縁で、頸部は細く、胴部中位下半に最大径をもち、胴部は算盤形を呈する。文様は頸部～胴部下半に施され、頸部と胴部下半には単節縄の羽状縄文を沈線で区画する横帯は無文帯を挟み 2 段もつ。2 段目には 2 点一組の多孔円形浮文（刺突 5～6 個）が 3 ヲ所付けられている。その下には単節縄文を地文にもつ菱形文を配する。縄文の縄目は粗く沈線の幅は 1.5 mm。直線的なフリーハンドで山形文を上下に合わせる複合山形文で、所謂菱形文である。器面のミガキ調整は不明である。

今回実測した下沼部弥生土器（第 1 図）と聚成図録 M2 を比べると、下沼部弥生土器は聚成図録 M2 の折返し口縁と異なる単口縁である。しかしながら、頸部～胴部菱形文様帯の文様構



第2図 下沼部遺跡位置図と弥生土器及び弥生石器実測図

(上図：大田区教育委員会 2009『大田区遺跡地図』を一部改変 (S=1/15,000)、下図：下沼部遺跡発掘調査団『下沼部遺跡』より転載)

成は聚成圖録 M2 と今回の実測図ではほとんど違いはなかった。ただし、頸部の太さは聚成圖録 M2 が 7 cm と細く、下沼部弥生土器の頸部は 10 cm と太いことが判明した（表 1 参照）。

そこで、戦前に立正大学考古学会学生の発掘・収集し、聚成圖録に登載された M41 武蔵下沼部出土の壺形土器（第 3 図 3）を参考資料として検討してみたい。この土器は単口縁の壺形土器で、口縁部径 13.0 cm、頸部径 7.0 cm、胴部最大径 25.5 cm、器高 38.5 cm を測る完形品である。口縁部はやや外反し、その形態は下沼部弥生土器（第 1 図）とほぼ類似するが、胴部はやや球形に近い形態を呈する。器面は無文で器面調整は不明である。この M41 の土器に類似する弥生壺形土器片（第 2 図左下）が、1977（昭和 52）年マンション工事に伴う緊急発掘調査で弥生時代の住居跡等から発見されている。この弥生住居跡から M41 の壺形土器片に類似する無文壺形土器片が、櫛歯状工具で整形された甕形土器（第 2 図左下）共伴しており、弥生時代中期末と考えられ、M41 の土器も同時期と思われる。

（野本・安井）

V. 弥生土器の複合山形文様（所謂菱形文様） （第 2 図・3）の検討

そこで問題となるのは、小林行雄が聚成圖録解説（森本六爾・小林行雄 1938・39a）で述べた複合山形文、所謂菱形文様帯壺の時期である。従来菱形文は、後期初頭が比田井克仁（比田井 1997）と後期前葉が安藤広道（安藤 2015）の

説がある。この菱形文壺形土器に伴う甕形土器が確認されないため、文様帯分析の型式学では納得できても客観的に時期を証明できない。

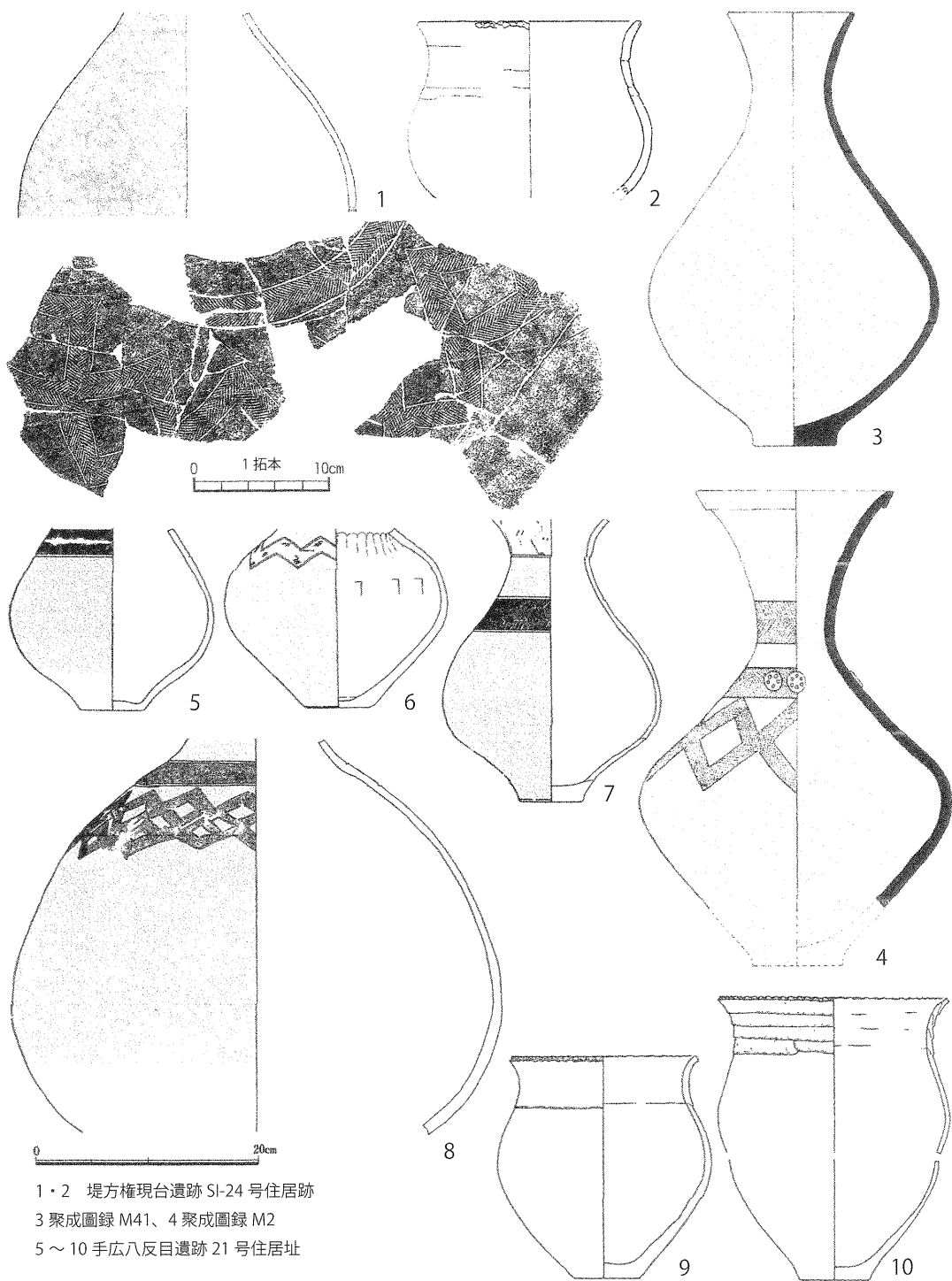
近年、この頸部～胴部上半の菱形文様土器を出土する遺跡は、東京湾西岸域の大田区久ヶ原遺跡、下沼部遺跡、堤方権現台遺跡と相模湾東岸域の鎌倉市手広八反目遺跡を挙げることができる。東京湾東岸域では、確認できていないので割愛する。

そこで、近年発掘調査された大田区堤方権現台遺跡 24 号住居跡出土の弥生土器（松原ほか 2013）と鎌倉市手広八反目遺跡 21 号住居址（手広遺跡発掘調査団 1984）出土土器を比較検討に加えたい。堤方権現台遺跡 24 号住居跡では壺形土器と甕形土器が共伴しており、壺形土器（第 3 図 1）は、口縁部を欠き頸部に羽状縄文を沈線区画し、胴部上半～中央にかけて羽状縄文を施文後に沈線区画を緩やかなフリーハンドで菱形文が施され、胴部が球形に膨らみ文様帯以外は赤彩されている。甕形土器（第 3 図 2）は、口縁部は押捺、胴部は輪積痕をほとんど擦り消したナデ調整で、胴部過半以下を欠損する。

鎌倉市手広八反目遺跡 21 号住居址例では、壺形土器（第 3 図 8）は口縁部を欠き、頸部に 3 段の羽状縄文を配して沈線区画され、胴部上半は菱形文を下位から山形文を加える崩れ三重菱形文を沈線区画し、胴部は球形に膨らみ文様帯以外は赤彩されている。壺形土器（第 3 図 5）は口縁部と胴部上半を欠き、胴部上半は羽状縄文を沈線区画され、文様帯以外は胴部下位まで

弥生土器計測値部位	口縁部径	頸部径	胴部最大径	総高（推定総高）	残存高
立正博所蔵弥生土器	14.5	10.0余	29.5余	(40.0)	32.4余
聚成圖録M2	18.0	7.0余	28.0余	(42.5)	39.0余
聚成圖録M41	13.0	7.0余	25.5余	38.5	

第 1 表 立正博弥生土器・聚成圖録 M2・聚成圖録 M41 の実測図比較（単位：cm）



第3図 菱形文様壺形土器と甕形土器出土遺跡

赤彩されている。

壺形土器（第3図6）は口縁部～頸部を欠き、胴部上半に沈線区画された鋸歯縄文（図から山形文に見える？）が施され胴部外面は部分的に赤彩されている。壺形土器（第3図7）は口縁部を欠き、頸部下半～胴部上半に交互斜行縄文3段の羽状縄文を沈線区画されるが、頸部上半の文様帯は摩耗があり不鮮明である。頸部で一旦すばみ、開きながら口縁部へ移行する。胴部は大きく膨らみ最大径を下位にもつ。器外面は丁寧にヘラミガキが施され、文様帯以外赤彩されている。甕形土器（第3図9）は全体の1/4を残す平底で、口縁部は外反し口唇部はヘラ状工具による交互刻み目を施されている。口縁部と胴部の境に粘土紐の輪積痕を残す。最大径は胴部中央よりやや上位に位置する。器内外面ともにナデ整形され、口径17.0 cm、胴部最大径19.6 cm、器高20.0 cmを測る。甕形土器（第3図10）は胴部中位を欠き、胴部上部が張り口縁部は外反する。口唇部はヘラ状工具による交互刻み目が施され、口縁部は粘土紐の輪積痕を4段残す平底である。粘土紐上は指頭の押えが認められ、焼失住居より器面が荒れており、器面調整は不明である。口径20.5 cm、胴部最大径21.0 cm、底径6.4 cmを測る。

これらの中で、第3図1と第3図8の壺形土器はいずれも口縁部が欠損しているの、口縁部がどのような形態なのか不明である。それに対して、森本実測図（折返し口縁の聚成圖録M2、第3図4）と菊池実測図（第4図7）（菊池1974b）は全体形態が判明している。

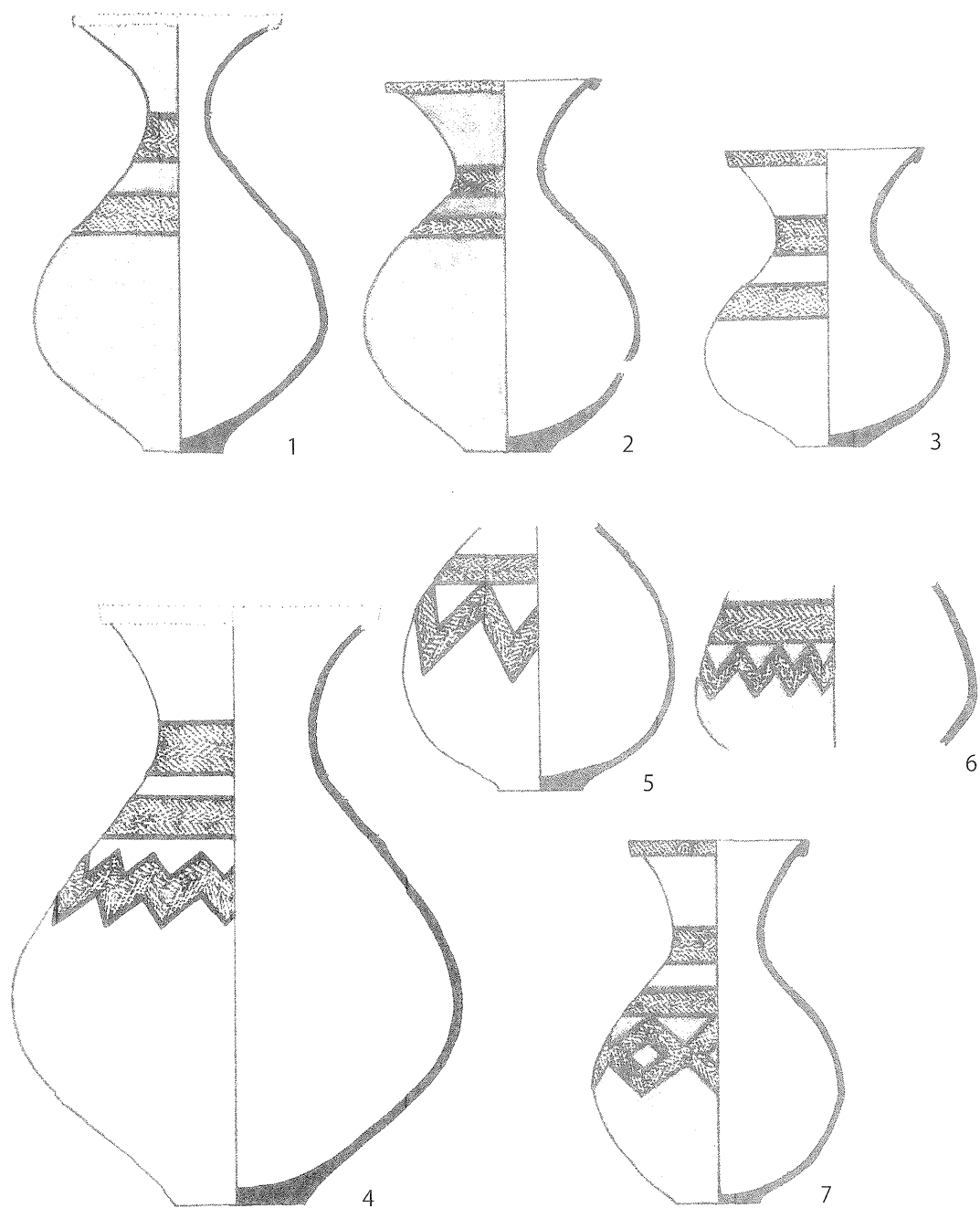
この菊池実測図の壺（第4図7）は、折返し口縁部に斜縄文と刺突円形浮文に、頸部と胴部上半に沈線区画横帯羽状縄文が施文され、胴部中央に沈線区画菱形文が施され、菱形文壺の全器形を窺い知る壺形土器といえる。しかしなが

ら、聚成圖録M2例（第3図4）と久ヶ原遺跡例（第4図7）ともに甕形土器が不明である。

以上の資料から判断される時期は、甕形土器がナデ甕整形のため東京湾岸に分布する後期前半と言える。先に挙げた堤方権現台例と手広八反目例では、堤方権現台例（第3図1）が緩やかなフリーハンドで菱形文様を描いているため久ヶ原Ⅰ式前葉の直線的山形文を複合する菱形文より新しい。手広八反目例は、甕形土器が平底の輪積痕多段と輪積痕一段ナデ甕のため、久ヶ原Ⅰ式でも新しい時期と思われるが、壺の胴部上半に菱形文を下位から山形文を加える崩れ三重菱形文を沈線区画しているため、もはや久ヶ原Ⅰ式段階とはいえず、久ヶ原Ⅱ式段階の時期に属し、幾何学文の重菱形文へと進む一歩手前と判断できる。これら立正博下沼部例と聚成圖録M2例と久ヶ原例と堤方権現台例および手広八反目例を比較すると、聚成圖録M2例と立正博下沼部例→久ヶ原例→堤方権現台例→手広八反目例の順でその時期が新しくなるとされる。

そもそも沈線区画羽状縄文山形文は宮ノ台式結紐文に辿れる。複合山形文という菱形文は、山形文が生成した直後に多摩川下流域左岸の久ヶ原遺跡周辺で生成されたと思われる。相模湾東岸の鎌倉市手広八反目遺跡の菱形文が崩れた三重山形文の壺形土器と平底ナデ甕の共伴から、手広八反目遺跡の三重山形文崩れ（崩れた菱形文、つまり重菱形文崩れ）は東京湾東岸域にも山形文壺が草刈遺跡A区9号跡（大村2009）等の出土から、沈線区画羽状縄文幾何学文に重山形文壺と重菱形文壺（東京湾東岸域に比較的多い）があることを考えれば、東京湾東岸域でも複合山形文、所謂菱形文は生成されていたと思われる。

（野本）



第4図 弥生式土器形式分類（文様帯の変遷）久ヶ原Ⅰ式（菊池 1974b）

VI. 下沼部弥生土器の評価

今回立正大学博物館第一展示室の下沼部遺跡弥生壺形土器は、南関東の南武蔵南部地域における久ヶ原Ⅰ式期前葉を代表する菱形文様であることが判明した。また、この土器は戦災の混乱で所在不明の森本六爾実測の聚成圖録 M2（折返し口縁壺形土器）を補填する重要な弥生壺形土器でもある。そして、大田区立郷土博物館で開催された平成 28 年度特別展（大田郷土博 2017）において、展示写真パネルの弥生土器を、森本六爾が下沼部貝塚で採集したと記載されていたが、戦前に久ヶ原周辺の遺跡を発掘・採集活動された立正大考古学会学生たちであったことも判明した。さらにⅣで述べたように、立正博所蔵の下沼部弥生壺形土器の出土地は、M41 と同じ下沼部遺跡（大田区遺跡地図 No. 48）の大田区田園調布本町 37 番 11 号付近にあると推定することも可能と思われる。そういう意味では、戦前の立正大考古学会学生たちが発掘・採集した立正博所蔵の下沼部弥生壺形土器発見地点は、M41 と同じ下沼部遺跡（大田区遺跡地図 No. 48）の大田区田園調布本町 37 番 11 号付近と考えることも出来る。

多摩川下流域左岸を代表する久ヶ原遺跡付近の下沼部遺跡は、従来縄文時代後期～晩期を代表する遺跡が弥生時代中期末期～後期前葉の遺跡としても今後重要視されると思われる。

さて、南関東弥生後期の久ヶ原式壺形土器の文様構造体（石川 2009）には、久ヶ原Ⅰ式初頭には沈線区画横帯羽状縄文、久ヶ原Ⅰ式前葉には沈線区画羽状縄文山形文、その直後に沈線区画羽状縄文菱形文（複合山形文）、久ヶ原Ⅱ式に沈線区画縦区画文、久ヶ原Ⅲ式に沈線区画羽状縄文幾何学文の順となる。今回実測した下沼部弥生土器の器面を飾る文様は、沈線区画山形文が生成した直後に山形文を複合した菱形文様で、多摩川下流域左岸の久ヶ原遺跡付近で生

成された下沼部弥生人が製作した壺形土器といえる。

立正博の下沼部弥生土器の菱形文様は、久ヶ原Ⅰ式菱形文様の中でも最も整った菱形文様である。また、この土器は戦前に立正大考古学会学生が発掘・採集し、現在まで大切に保存してきた考古資料である。今後この資料は後世に伝えきるべく、一次資料であるこの土器は早急に修復する必要がある。そして、早急に二次資料を近年保存科学で重要視されてきたクローン文化財の技術（青野 2016）を応用した技術開発で製作する必要（野本 2017）があると思う。さらに、この二次資料は貸し出すことにより、博物館として展示・普及に役立つものと思われる。これらが実施されれば、下沼部弥生土器は久ヶ原式土器の典型的菱形文様壺形土器として後世に残るものと思われる。

最後になりましたが、本稿の作成には戦前の立正大学関係の考古学資料については、立正大学元学長・名誉教授坂詰秀一先生の直接ご指導賜り、池上悟先生、時枝務先生、紺野英二先生、立正大学博物館足立佳代、元立正大学博物館吉水美紗登、北原實徳、松崎元樹の各氏と有明文化財研究所、東京都埋蔵文化財センターに大変お世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。（野本・安井）

【註】

- (1) この遺跡は通称縄文時代後晩期の貝塚と呼ばれており、特に昭和 51 年に縄文晩期と弥生時代中期末の集落址が発見されたことにより、縄文時代の貝塚と区別するため貝塚ではなく遺跡とすべきである。
- (2) すでにこの図録の編集者は下沼部遺跡出土の弥生土器口縁部について、折返し口縁ではなく単口縁と記述している。なお立正博の下沼部弥生土器（大田郷土博 2017、pp13）を「森

本六爾が採集したとされ、森本六爾が彌生式聚成圖録に掲載された土器とされた」と記述しており、森本六爾が下沼部遺跡で採集し、聚成圖録に掲載したことを疑問視しているが、展示パネルの弥生土器を実測されておらず、森本実測の聚成圖録図 M2 と比較検討されていない。

(3) 現在の下沼部貝塚は（大田区遺跡地図 2009）では、大田区遺跡一覧№.48 田園調布本町 35・37～42 番と範囲が推定されている。

(4) 現在下沼部遺跡は大田区田園調布本町 37 番 11 号にあたり、1976（昭和 51）年のマンション工事の緊急発掘調査では縄文・弥生の住居址等が発見されている。特に弥生中期後半末の住居址 1 軒が確認されており、おそらくこの周辺にも後期の住居址が存在する可能性が考えられる。

【参考文献（アイウエオ順）】

青野由利 2016「クローン文化財」毎日新聞 2016 年 9 月 3 日（土）14 版 3 面土記（do-ki）
浅田芳朗 1982「不評と讃仰の中で久ヶ原の発掘調査」『考古学の殉教者—森本六爾の人と学績—』pp132～135 柏書房
安藤広道 2015「久ヶ原式、山田橋式、中台式ほか」『考古調査 12 弥生土器』pp381～383 株式会社ニューサイエンス社
石川日出志 2009「あとがき、2 私はここがわからない」『南関東の弥生土器 2 ～後期土器を考える～』考古学リーダー 16 pp270～272 六一書房
市原寿文 1953「武蔵田園調布観音塚古墳発掘調査概要」『白山史学』1
江坂輝彌・久保田辰彦・近藤隆定 1939「下沼部貝塚出土の動物土偶と紡錘車形土製品」『考古学』10-3
大田区教育委員会 1989『多摩川台古墳群発掘調査報告書』I
大田区教育委員会 1993『多摩川台古墳群発掘

調査報告書』II

大田区教育委員会 2009『大田区遺跡地図』大田区立郷土博物館埋蔵文化財担当

大田区立郷土博物館 2017「II-3 久ヶ原式土器を特徴づける優美な壺」『平成 28 年度特別展 土器から見た大田区の弥生時—久ヶ原遺跡発見、90 年—』pp13 大田区教育委員会

大村 直 2009「I 各地域の後期土器—久ヶ原式と山田橋式」『南関東の弥生土器 2』考古学リーダー 16 pp47

河合英夫・野本孝明 2001a「第 2 節弥生時代（丸山遺跡）『扇塚古墳』扇塚古墳発掘調査団

河合英夫・野本孝明 2001b「第 1 節古墳時代扇塚古墳」『扇塚古墳』扇塚古墳発掘調査団

菊池義次 1966a『久ヶ原弥生式遺蹟—（遺跡編一）大田区の文化財第 3 集表紙の壺 大田区教育委員会

菊池義次 1966b「久ヶ原弥生式遺蹟調査研究小史（その発見、発掘、研究、調査の歴史）『久ヶ原弥生式遺蹟—（遺跡編一）大田区の文化財第 3 集 PP9～12 大田区教育委員会

菊池義次 1974a「第Ⅲ編弥生文化」『大田区史』資料編考古 I pp51～103 大田区史編纂委員会

菊池義次 1974b「第Ⅲ編弥生文化」『大田区史』資料編考古 I 図版 pp19 下段右隅 大田区史編纂委員会

酒詰伸男 1959『日本貝塚地名表』土曜会

坂詰秀一 2016a「立正大学博物館の思い出」『品川キャンパス展立正大学博物館 15 年のあゆみ』pp1 立正大学博物館

坂詰秀一 2016b「立正大学博物館の思い出」『品川キャンパス展立正大学博物館 15 年のあゆみ』pp12 立正大学博物館

下沼部遺跡発掘調査団 1980『下沼部遺跡』

手広遺跡発掘調査団 1984『手広八反目遺跡発掘調査報告書』pp60～65

戸田哲也 1996「桜橋付近遺跡発掘調査報告書」桜橋付近遺跡調査会

鳥居龍蔵 1893「武蔵国荏原郡調布村旧下沼部貝塚」『東京人類学会会誌』8 - 86

西岡秀雄 1936「荏原台地に於ける先史及び原史時代の遺跡遺物」『考古学雑誌』26 - 5

野本孝明 1982「多摩川台公園内横穴墓」『大田区の埋蔵文化財』3 大田区教育委員会

野本孝明ほか 1992『浅間神社古墳』東京急行電鉄株式会社・浅間神社古墳調査団

野本孝明 1992a「田園調布本町貝塚」『大田区の埋蔵文化財』12 大田区教育委員会

野本孝明 1992b「国史跡亀甲山古墳測量調査」『大田区の埋蔵文化財』12 大田区教育委員会

野本孝明 1998『東京都指史跡定宝萊山古墳』東京都指史跡定宝萊山古墳調査会

野本孝明 1999a「V-1 タイプサイトの実像—久ヶ原遺跡」『特集弥生時代の東京』文化財の保護第31号 pp115 ~ 130 東京都教育委員会

野本孝明 1999b「V-1 タイプサイトの実像—久ヶ原遺跡」『特集弥生時代の東京』文化財の保護第31号 pp129・130 東京都教育委員会

野本孝明 2017「研究メモ「発想でヒント クローン文化財技術を弥生土器の復元に応用を」『東京の遺跡』No.107号 東京考古談話会

野本孝明 2018「短評 大田区立郷土博物館土器から見た大田区の弥生時代—久ヶ原遺跡発見、90年—を観覧して」『東京の遺跡』No.110 東京考古談話会

比田井克仁 1997「弥生時代後期における時間

軸の検討—南武蔵地域の検討を通して」『古代』第130号 pp99 ~ 134 早稲田大学考古学会

松崎元樹 2004「Ⅱ大田区内の横穴墓—考古学から見た大田区—」『大田区の文化財』30

松原典明ほか 2013「Ⅲ弥生集落の調査、17」SI-24号住居跡」『武蔵堤方権現台遺跡』pp66 ~ 71 不變山永寿院

森本六爾・小林行雄 1938・39a『弥生式土器聚成圖録正編』解説東京考古学会

森本六爾・小林行雄 1938・39b「彌生式土器聚成圖録正編 M2、M41」『弥生式土器聚成圖録正編』東京考古学会

吉田格・川崎義雄 1969「東京都大田区下沼部貝塚出土の晩期縄文土器」『石器時代』9

立正大学考古学会 1968「銅鐸6号本会収蔵品目録(二)」『銅鐸(全)』pp29・30 小宮山書店

立正大学博物館 2016『品川キャンパス展立正大学博物館15年のあゆみ』

【挿図出典】

第2図上段大田区遺跡分布地図(大田区教育委員会2009)、下段下沼部遺跡出土遺物(下沼部遺跡発掘調査団1980)

第3図1・2堤方権現台遺跡24号住居跡pp61 ~ 71(松原典明ほか2013)、3聚成圖録M41、4聚成圖録M2(森本六爾・小林行雄1938・39b)、5~10手広八反目遺跡21号住居跡pp60~65(手広八反目遺跡調査団1984)

第4図1~7弥生式土器形式分類(文様帯の変遷)久ヶ原I式図版pp19(菊池義次1974b)

8. 所蔵資料の整理・修復

(1) 写真資料のデジタルデータ化

吉田格コレクションのうち、1,844 枚のカラースライド資料をデジタルデータ化した。委託先は、(株)堀内カラーである。

(2) 収蔵資料の保存修復事業

当館では、収蔵資料のうち脆弱で今後の保存・展示が困難なものを選び、継続して保存修復事業を実施している。特に、平成 29 年度からは当館の収蔵品の核となっている吉田格コレクションの縄文土器を継続して保存修復している。

令和 2 年度は、吉田コレクションのほかにエントランスに展示してあるミャンマーの鐘の一部が破損しているのが確認されたため、早急に修理の必要があると判断し、保存修復を実施した。いずれも委託先は、(株)東都文化財保存研究所である。

【土器の保存修復の工程】

- ①事前調査：保存状況を確認し、現況の写真撮影、記録を行った。土器は接合部や復元石膏が劣化し、脆弱な状態であった。
- ②解体・保存処理・クリーニング：接着剤や石膏で接合されている部分を、有機溶剤を用いて解体し、破片の接着剤等による汚れを有機溶剤で除去した。

③復元作業：接点のある破断資料は、アクリル系樹脂により接合し、欠損部分はエポキシ系樹脂により復元した。

④彩色：接合・復元部分は、顔料（岩絵具）、アクリル樹脂エマルジョン等を用いて古色付けを行った。

⑤修理後調査：修理状況を確認し、写真撮影、修理記録を作成した。

なお、土器の保存修復で使用した材料については、下表に掲載した。

以下、平成 30 年度から令和 2 年度に実施した保存修復事業について報告する。

①平成 30 年度保存修復事業

資 料：縄文土器・深鉢（東光台遺跡：吉田格コレクション）

資料の概要：本資料は高さ 17cm、推定される口径 18cm、底径 9.5cm の小型の深鉢である。色調は明褐色で、胎土は 3mm 程のチャート等の粒が目立つ。焼成は良い。口縁はやや開き、底部は平らである。文様帯は大きく二分される。器高の約 4 分の 1 を占める口縁部と胴部である。口縁外面には刻みを施した粘土紐をめぐらせ、口径を 4 等分した部分に半円形の粘土を貼り付ける。その下には半裁竹管による条線が横位にめぐる。

胴部は縦位に条線で区画し、区画された中を

使用材料	使用目的	品名	製造会社名称
有機溶剤	遺物の汚れ、油脂成分の除去	CP アセトン	大伸化学株式会社
アクリル系樹脂	接合	バラロイド B-72 (30%)	三恒商事株式会社
エポキシ樹脂 (主剤・硬化剤)	ヒビ及び欠損部の充填、復元	バイサム	(有)新成田総合社
アクリル樹脂エマルジョン	彩色	TURNER ACRYLA GOUACHE	TURNER COLOUR WORKS, LTD.
アクリル絵具		HOLBEIN ACRYLA MATTE MEDIUM	HOLBIN WORKS, LTD.
つや消しメディウム		HOLBEIN ACRYLA MATTE MEDIUM	HOLBIN WORKS, LTD.
岩絵具		新彩岩絵具	上羽絵惣株式会社
		天然岩絵具	ナカガワ胡粉絵具株式会社

縦位に弧状の条線を配する。弧状文は内側を向き合わせて一対とし、その内部に矢羽状の条線を縦位に入れる。口縁部、胴部ともに条線文の上に中央を刺突した円形浮文と棒状浮文を等間隔に貼り付けている。器形や文様の特徴から諸磯C式土器であり、縄文時代前期後葉の所産である。

東光台遺跡は、群馬県桐生市の東部、栃木県との県境の菱町に所在する。現在周知の埋蔵文化財包蔵地としては、伊豆田遺跡と称されている。渡良瀬川の支流である桐生川によって南北に開析された細い谷の左岸にある。遺跡は足尾山地裾、桐生川に向かって東西に延びる舌状台地の上面及び南斜面に広がり、現在は宅地開発されている。遺跡のある台地は、戦時中に遺跡の西に所在する旧群馬高専(現群馬大学工学部)の教職員と生徒たち、地元の人々によって食糧増産のための開墾を行った地であり、その時に縄文土器や弥生土器、土師器や須恵器も出土している(社会科学研究部 1964)。「東光台」という名称もこの時に付けられている。⁽¹⁾

本遺跡は、昭和 23 (1948) 年 3 月、昭和 25 (1950) 年春、昭和 39 (1964) 年 8 月、平成 7 (1995) 年の計 4 回発掘調査されている。昭和 23 年の調査は吉田格、周東隆一、相沢忠洋によるもので、今回保存修復した土器は、このとき住居跡から出土した。住居跡は炉跡が確認されたが、後世の攪乱によりプランが把握されていない。土器は調査後、吉田によって武蔵野郷土館に持ち込まれ、復元されたと思われる。3分の1ほど残存率であるが、口縁から底部まであり、全体が復元されていた。調査当時は諸磯期の全形がわかる土器としては貴重で、『世界考古学体系』、『日本の考古学』等に掲載されている。そのほかにも土器片等が出土しているが、詳細は不明である。

昭和 25 年の調査は、藺田芳雄、周東隆一、

両毛考古学会会員、地元高校生等によるもので、旧石器、縄文土器、弥生式土器などが出土している(藺田 1970)。昭和 39 年の調査は宅地開発に伴うもので、藺田芳雄を発掘調査担当者として群馬県立桐生女子高等学校、桐生高等学校の生徒たちによって調査された。この時の調査では弥生時代前半期の可能性のある住居跡が確認されたほか、縄文時代早期から前期後葉までの土器、石器、弥生時代中期・後期の土器片、奈良時代から平安時代にかけての土師器、須恵器片などが出土している(社会科学研究部 1964)。

平成 7 年は、住宅建築に伴う小面積の調査であるが、縄文前期の土坑群、古代の住居跡が確認され、それぞれの時代の遺物が出土している(川道 1996)。

東光台遺跡は、断片的ながら 4 回の発掘調査により、旧石器時代、縄文時代草創期、早期・前期、中期初頭、弥生時代、平安時代の石器、土器が出土しており、舌状台地上に長期間にわたって集落が営まれていたことが明らかにされている。本資料は、北関東における縄文時代前期・諸磯C期における土器として、また、学史的にも貴重な資料である。

(1) 増田修氏にご教示いただいた。

【引用参考文献】

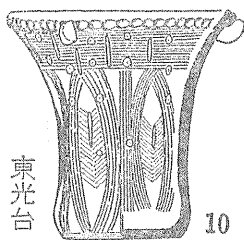
社会科学研究部 1964『群馬県桐生市伊豆田遺跡調査報告』群馬県立桐生女子高等学校

藺田芳雄 1970「伊豆田遺跡」『菱の郷土史』菱町郷土史編纂委員会

八幡一郎編 1959『世界考古学大系』1 日本Ⅰ 先縄文・縄文時代 平凡社

岡本勇・戸沢允則 1965「3 関東」『日本の考古学』Ⅱ河出書房新社

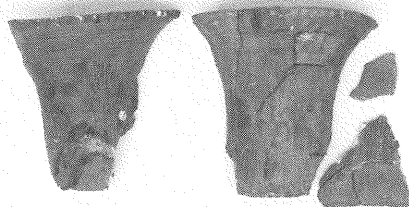
川道 亨 1996「1. 桐生市菱町 伊豆田遺跡」『平成 7 年度発掘調査報告』桐生市教育委員会



実測図



修復前の状況



修復前の状況



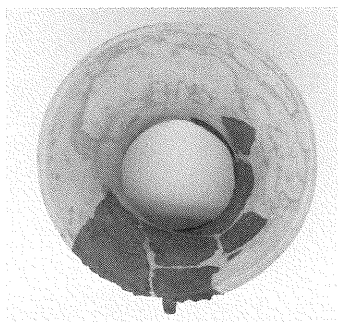
土器の解体状況



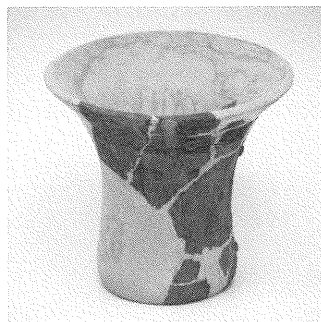
土器の復元状況



修復完成状況



土器の復元状況



修復完成状況

*実測図は岡本・戸沢 1965 より転載

①平成 30 年度 保存修復事業 作業工程（深鉢形土器：東光台遺跡）

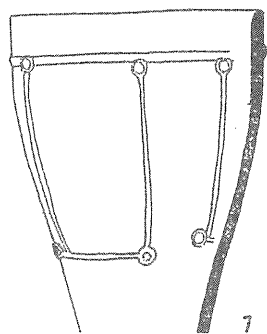
②令和元年度保存修復事業

資 料：縄文土器・深鉢（称名寺 B 貝塚：吉田格コレクション）

資料の概要：高さ 27.8cm、口径 22.5cm、底部は欠けている。器形は底部から胴部に向かって緩く広がり、胴部の中央ではほぼ垂直に立ち上がる。色調はややくすんだ褐色で、胎土、焼成は良い。外面には口縁から下に 4cm の位置に細い低隆帯が廻り、ほぼ等間隔の位置に 8 ヲ所長

さ約 20cm の低隆帯を縦位置に貼り付ける。縦位の低隆線に上下端部に環状の低隆帯を貼り付け、下端には、一つ置きに環状帯を結ぶように低隆帯が横位にめぐる。器面に縄文などの文様はみられない。口縁から 6cm 程下に補修孔と思われる外径 1cm の孔が開く。これに対応する部分は欠けていたが、復元した。

出土状況や時の特徴などから、称名寺Ⅱ式の土器であり、縄文時代後期初頭の所産である。



実測図



解体の状況



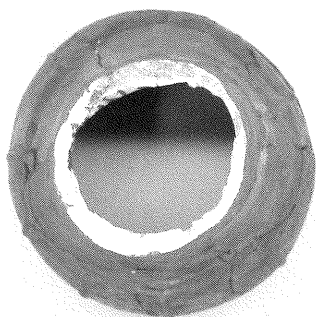
修復前の状況



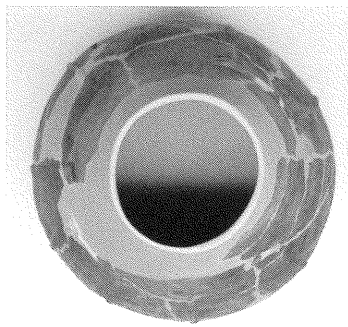
土器の復元状況



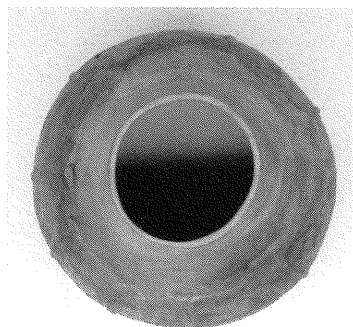
修復完成状況



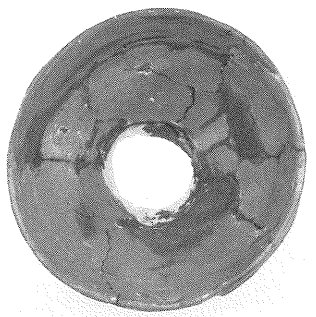
底部 修復前の状況



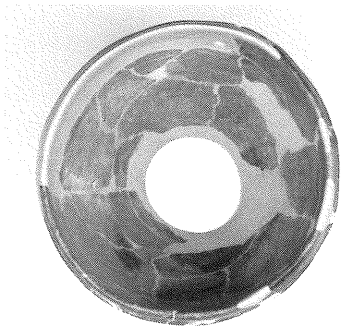
土器の復元状況



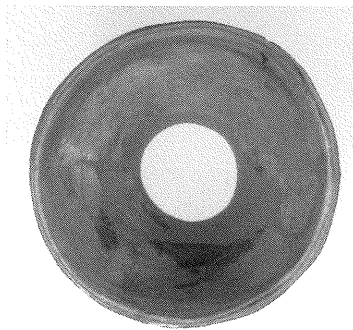
修復完成状況



見込み 修復前の状況



土器の復元状況



修復完成状況

※実測図は吉田 1960 より転載

②令和元年度 保存修復事業 作業工程（深鉢形土器：称名寺 B 貝塚）

③令和元年度保存修復事業

資 料：縄文土器・深鉢（称名寺B貝塚：吉田格コレクション）

資料の概要：高さ 26.5cm、口径 18.5cm、底径 7cm であり、口縁から底部までがそろそろ。器形は底部から胴部に向かって緩く広がり、口縁部で内湾する。明色調で胎土にやや砂粒が目立つ。焼成は良い。

外面には口縁に沿って沈線が施されるが、口縁周囲を連続せず、6 ヶ所で線が途切れ、途切れた沈線端部はそれぞれ刺突される。沈線の下には刻み目がめぐる。外面の上半には状痕文がみられ、下半に文様はみられないが、よく磨かれている。

出土状況や時の特徴などから、称名寺Ⅱ式の土器であり、縄文時代後期初頭の所産である。

称名寺貝塚について

称名寺貝塚は、横浜市金沢区金沢町の称名寺及びその周辺に分布する著名な貝塚である。貝塚からは貝殻だけでなく、イルカなどの多くの獣骨が出土している。また、銚、ヤス・釣針、土錘などが多いことが特徴的で、漁労が盛んであったことが明らかになっている。

吉田格は、昭和 26（1951）年 2 月に日本考古学協会縄文部会として A・B 貝塚の発掘調査を行った。その後、武蔵野文化協会・東京都公園協会共催の事業として昭和 32（1957）年 9 月から 10 月にかけて B・C・G 貝塚を、昭和 41（1966）3 月に D 貝塚の調査を実施した。

吉田は、貝塚から出土した土器について縄文

時代後期初頭の土器群の基準資料として「称名寺式」と設定した。さらに、A 貝塚と B 貝塚から文様の異なる土器群を確認したことから、A 貝塚の太い沈線で弧線や S 字文を描き、磨消縄文を施された土器群を第 1 群、B 貝塚の磨消縄文の代わりに刺突の列点や刻みを施された土器群を第 2 群と設定した（吉田 1960）。

その後の研究により、称名寺式第 1 群は称名寺Ⅰ式、第 2 群は称名寺Ⅱ式とされている。また、編年研究の深化により、現在称名寺式土器はⅠ式を 5 段階に、Ⅱ式を 7 段階に細分されている。

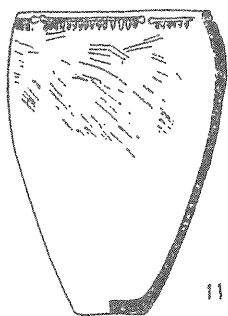
吉田は、平成元（1989）年に長年にわたって調査・研究された資料を立正大学学園に寄贈され、その後、平成 14（2002）年、立正大学博物館の開館に伴い資料が移管された。寄贈品には、称名寺貝塚をはじめとする縄文時代を中心とした土器、石器、骨角器など数多くの資料があり、本館の中心となす収蔵・展示品である。これらの資料は、縄文時代の研究に欠かすことのできないものであるばかりでなく、学史上も大変貴重な資料である。

【引用参考文献】

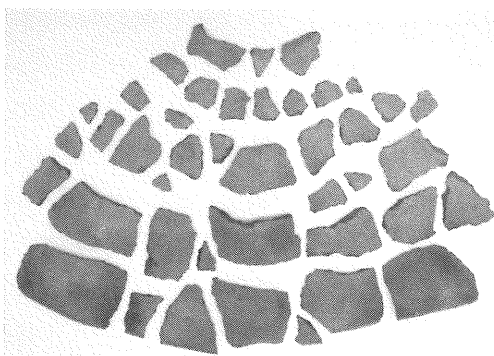
吉田格 1960『横浜市称名寺貝塚』東京都武蔵野郷土館調査報告書

吉田格 1990『吉田 格コレクション 考古資料図録』立正大学学園

内田勇樹 2008『第 5 回特別展 吉田格の業績ー吉田格コレクションー』立正大学博物館



実測図



解体の状況



側面 修復前の状況



土器の復元状況



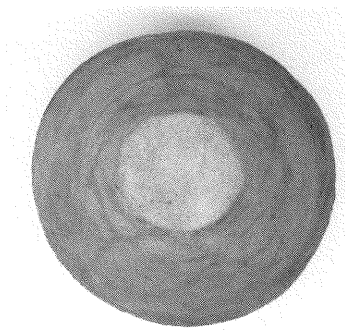
修復完成状況



底部 修復前の状況



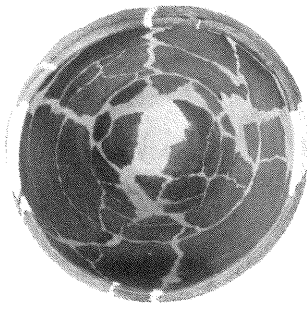
土器の復元状況



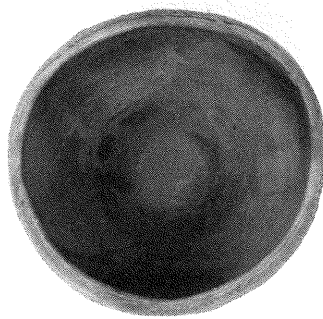
修復完成状況



見込み 修復前の状況



土器の復元状況



修復完成状況

※実測図は吉田 1960 より転載

③令和 2 年度 保存修復事業 作業工程（深鉢形土器：称名寺 B 貝塚）

資 料:ミャンマーの鐘（撫石庵コレクション）
資料の概要：この鐘の材質は青銅で、黒味がかった金色である。総高 61.0cm、口径 44.0cm
口唇の厚さ 4cm を測る。破損したのはこの鐘と
セットとなっている鐘を吊るすための用具で総
高 47cm、最大幅 28cm を測る。用具には数体の
人物像の装飾があり、このうちの 1 つの頭部が
破損した。

この鐘は、眞鍋孝志氏（元日本古鍾研究会会
長）が蒐集された世界各国の梵鐘を中心とした
コレクションの一つである。平成 12、13 年に
立正大学に寄贈され、平成 14 年博物館の開館
に伴い移管された。

①処理前調査：現状確認。写真撮影

②樹脂塗布：保護を目的として、接合面へアク
リル樹脂パラロイド B72 を 2 回、塗布含浸した。

③接合：エポキシ系接着剤を用い、接合した。

④経時変化調査

接合後、一定期間変化の有無を確認した。

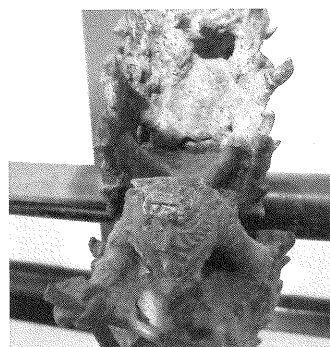
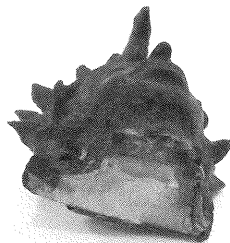
⑤処理後調査

写真撮影。保存処理記録作成



展示状況

使用材料	使用目的	品名	製造会社名称
アクリル樹脂	樹脂含浸	パラロイド B-72	Rohm & Hass Co. (USA)
エポキシ系接着剤	接合	ボンドクイック 5	コニシ株式会社



修理前



エポキシ樹脂の塗布



接合



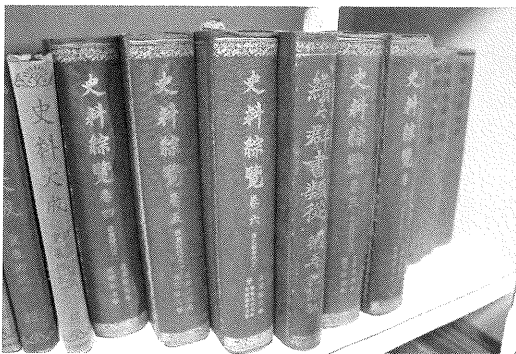
修理完了

9. 館内整備

2020年度は、新型コロナウイルス感染症の蔓延により年度当初より休館となった。また、4、5月は職員が勤務制限となったため、職員の出入がほとんどない状態となった。そのため、館内の空気が滞留し、気温の変化の大きい時期でもあり、館内にカビが発生してしまった。また、2020年は梅雨時期に雨が多く、期間も長かったため、館内の湿度が高まり、2階展示室及び館長室にカビが発生した。2階は気温、湿度ともに上昇しやすく、以前から展示ケースなどにカビが発生することがあったが、その都度、清掃と消毒し、対処していた。



2階展示室に展示されている土器に発生したカビ



資料室に保管されている蔵書に発生したカビ

展示ケース及び展示資料の清掃

6月からの勤務の再開に伴い、2階展示室の展示ケース及び展示資料の清掃・消毒を実施した。展示ケース1台ごとに展示資料を全て出し、内部をガラスクリーナー及び掃除機で清掃後、アルコールで消毒した。

展示資料は、ハケ、筆でほこりを落とした後、消毒用アルコールを噴霧した。台紙等は新しいものに入れ替え、ガラス棚には滑り止めを兼ねた防虫・防カビシートを敷いた。

展示ケースの上は、掃除機をかけ、消毒用アルコールで拭いた。特に展示ケースと窓との間は結露が生じていたためか、展示ケースの裏側にもカビが発生していた。これらも消毒用アルコールで除去した。また、今後の湿気、カビ対策として除湿機能付空気清浄機を各展示室に2台ずつ設置した。

しかしながら、今回は展示資料の土器や木製品、紙製品などにカビが発生したこと、館長室では特に西日が当たり気温が上がりやすいこと、エアコンが使用できないなどの悪条件が重なったことで、大量のカビが発生したことなどから、熊谷管財課に現状確認を依頼し、対応を相談した。その結果、博物館から燻蒸及びエアコン清掃の要望書を提出し、熊谷管財課の事業として実施されることとなった。

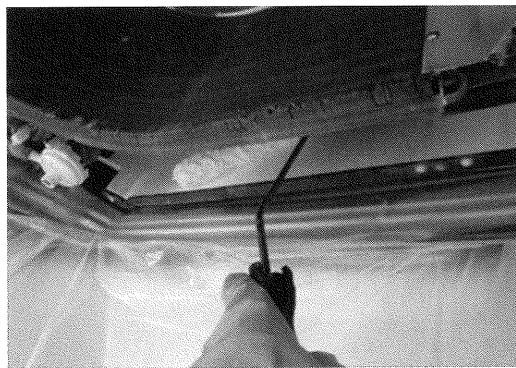
また、博物館周囲の高木の枝が繁って屋根の



博物館周囲の高木伐採



エアコン部品の洗浄作業



エアコンの防カビコーティング作業

上を覆う状況であったため、風通しが良くなるよう伐採も行った。これも熊谷管財課の事業によるものである。

以下、エアコン防カビ対策工事、密閉燻蒸施工及び博物館周囲の高木枝伐採について報告する。工事の管理はいずれも埼玉福祉会である。

エアコン防カビ対策工事

- (1) 施工名称 エアコン防カビ対策工事
- (2) 施工場所 第1展示室、第2展示室及び1F、2F廊下
- (3) 施工業者 株式会社ファインテック
- (4) 工期 令和2年12月7日
- (5) 施工内容 エアコン清掃及び防カビコーティング
- (6) 施工工程
 - ①養生 作業前に周辺の床や展示ケースが汚れないようにポリシーとでしっかり養生を行う。
 - ②部品取り外し 掃除機等による清掃、エアコン部材を傷つけないよう、慎重に取り外す。
 - ③菌検査 作業前の真菌検査を行う。
 - ④洗浄 熱交換器は高圧洗浄機にて丁寧に洗浄する。エアコン部材は、水道水で洗浄し、乾燥させる
 - ⑤刷毛にてアルコールを十分に塗布する。

- ⑥ウエスにて丁寧に拭き上げる。
- ⑦防カビコーティング・エアファイン噴霧、刷毛にて水性防カビコーティング材を塗布する
- ⑧菌検査・滅菌綿棒による採取
- ⑨プレプレフィルター設置
吸込口に防カビフィルターを設置する
- ⑩復旧作業・エアコン部材取り付け
- ⑪最終清掃・ゴミや作業道具の置き忘れなどをチェックしながら清掃する
- ⑫最終確認を行う・立会い確認

密閉燻蒸施工

- (1) 施工名称：密閉燻蒸施工
- (2) 施工場所：1階展示室（286.0 m³）
2階展示室（215.0 m³）、館長室1・2（113.0 m³）、収蔵室（50.0 m³）
- (3) 施工業者：関東港業株式会社 京浜事業部 東京営業所
- (4) 施工期間：2021年1月25日～2月1日
- (5) 施工目的：殺虫、殺卵、殺カビ
- (6) 施工方法：密閉燻蒸施工
- (7) 使用薬剤：文化財用殺虫殺菌燻蒸剤「エキヒュームS」（公財）文化財虫菌害研究所 認定薬剤 登録番号 第16号
- (8) 基準投薬量 200 g / m³
- (9) 使用薬量 132.8kg



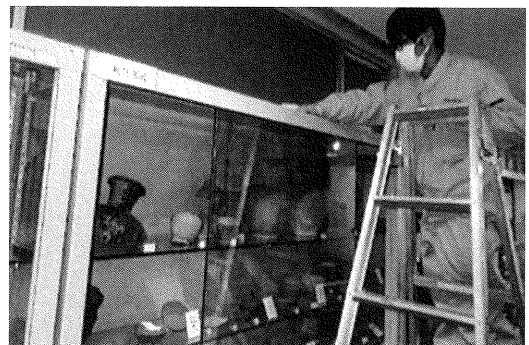
機械類の設置



機械類の設置



投薬作業



展示ケースの清拭作業

(10) 燻蒸時間：48 時間

(11) 燻蒸時温湿度 投薬開始前（対象地区内）
21℃ 55%

排気開始時（対象区域付近）20℃ 56%

(12) 供試虫：コクゾウ、供試菌：黒色麹菌

(13) 殺虫処理効果判定：（公財）文化財虫菌害
研究所 令和3年3月10日付判定書によ
れば、殺菌効果100%であった。

(14) 作業工程

- ①防爆型攪拌扇に投薬ホースを接続し、対象となる場所に設置する。
- ②ガス排気用防爆型軸流扇に風管を接続し、設置する。
- ③換気扇等の目張りをする。
- ④供試虫・供試菌を確認し、各所に設置する。

⑤投薬用間仕切りパネル、高濃度測定器を設
置。

⑥間熱式気化器、減圧用ガス吸着器、消火器、
消火砂、空気呼吸器を設置する。

⑦立入り禁止区域を設定する。

⑧エキヒュームのガス化投薬作業を開始する。

⑨ガス濃度測定及びガス漏洩の確認

⑩48時間経過後活性炭ガス吸着装置による
除毒排気作業を行う。

⑪ガス排気用爆型流扇による強制排気を行う。

⑫ガス検知器により安全確認を行う。

⑬洗浄不織布による展示ケースのアルコール
清拭作業を行う。

⑭供試虫・供試菌を確認する。

Ⅲ. 受贈図書目録

(2020 年 4 月～ 2021 年 3 月)

〈青森県〉

青森市教育委員会

- ・ 新城山田 (4)・(5) 遺跡発掘調査報告書
- ・ 市内遺跡発掘調査報告書 29

八戸市教育委員会

- ・ 年報 ―平成 31・令和元年度―
- ・ 堀り day はちのへー八戸埋蔵文化財ニュース
- ・ 八戸市埋蔵文化財調査報告書 八戸藩武家屋敷湊家推定地
- ・ 八戸市埋蔵文化財調査報告書 八戸城跡第 42 地点
- ・ 八戸市埋蔵文化財調査報告書 酒美平遺跡第 19 地点
- ・ 八戸市埋蔵文化財調査報告書 熊野堂遺跡第 7 地点
- ・ 八戸市埋蔵文化財調査報告書 八戸市内遺跡発掘調査報告書 41 史跡是川石器時代遺跡

八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館

- ・ 泉山兄弟と是川遺跡
- ・ 是川縄文館秋季企画展 白神山地の縄文
- ・ 令和元年度秋季企画展図録「山のいとなみ」

つがる市教育委員会

- ・ つがる市遺跡調査報告書 12 竹鼻 (3) 遺跡発掘調査報告書

〈宮城県〉

東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館

- ・ 年報 11 2019

〈茨城県〉

土浦市立博物館

- ・ 土浦市立博物館紀要 第 30 号

〈栃木県〉

那珂川町なす風土記の丘資料館

- ・ 令和元年度 特別展記念シンポジウム報告書
那須の古代窯業

太田原市歴史民俗資料館

- ・ なす風土記だより 第 1 号

太田原市なす風土記の丘湯津上資料館

- ・ なす風土記の丘企画展 第 1 部 なすの縄文遺跡 ―大田原市・那珂川町の遺跡を中心に―

公益財団法人 とちぎ未来づくり財団

埋蔵文化センター

- ・ 研究紀要 第 28 号

〈群馬県〉

高崎市観音塚考古資料館

- ・ 渡来人がつくった土器 ―高崎市内出土の韓式系土器―
- ・ 高崎市中心Ⅱ遺跡 1 号古墳出土埴輪の世界
かみつけの里博物館
- ・ 飾り大刀 武器からみた古墳時代のぐんま

高崎市教育委員会

- ・ 第 42 回企画展示図録『金井沢碑の遺産～古代豪族と仏教～』

〈埼玉県〉

白岡市教育委員会

- ・ 紀要 2
- ・ 白岡市埋蔵文化財調査報告書第 29 集 神山遺跡

日本工業大学工業博物館

- ・ 工業技術博物館ニュース No. 104
- ・ 工業技術博物館ニュース No. 105
- ・ 工業技術博物館ニュース No. 106
- ・ 工業技術博物館ニュース No. 107
- ・ 工業技術博物館ニュース No. 108

川越市立博物館

- ・ 川越市立博物館紀要 第 2 号

- ・川越の地口行灯
- ・笠幡 発智家文書目録

鉄道博物館

- ・鉄道博物館企画展 全線運転再開記念 常磐線展

朝霞市博物館

- ・朝霞市博物館研究紀要 第17号
- ・朝霞市博物館利用事業資料集Ⅲ
- ・朝霞市博物館調査報告書 第9集 天明稻荷神社の絵馬・扁額

入間郡毛呂山町教育委員会

- ・毛呂山町 町内遺跡発掘調査報告書（11）吉川國男
- ・栗原文蔵さんの研究と「さきたま風土記」
- ・あらかわ学会
- ・調査概要 茅野市宮川の寒天づくりについて（一）
- ・〈特集—寒天製造の文化と現状〉

埼玉考古学会

- ・条里制の全体像と遺跡の見つけ方

深谷市教育委員会

- ・埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 白山遺跡Ⅵ 第166集
- ・埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 熊野遺跡（第180次）第168集

埼玉県立嵐山史跡の博物館

- ・埼玉県立史跡の博物館紀要 第13号
- ・『館報』第39号

埼玉県児玉郡美里町遺跡調査会

- ・美里町遺跡調査会報告書 中耕地遺跡Ⅱ 第14集
- ・美里町遺跡調査会報告書 長坂遺跡Ⅲ 第15集
- ・美里町遺跡調査会報告書 稻荷林遺跡Ⅱ・村後遺跡C 第29集
- ・美里町遺跡調査会報告書 熊谷遺跡 第27集

飯能市立博物館

- ・飯能市立博物館資料集第一集 須田家日記

（一）

- ・飯能市立博物館館報（実績報告書）きつとすレポート

- ・山里に咲いた芸 説経師・薩摩千代太夫と幻の「片瀬人形」

- ・飯能市立博物館館報（実績報告書）きつとすレポート 第2号

久喜市教育委員会

- ・日光道中 栗橋宿・栗橋関所

寄居町教育委員会

- ・寄居町文化財調査報告書 町内遺跡 21
- ・寄居町文化財調査報告書 町内遺跡 17 寄居廃寺跡
- ・寄居町文化財調査報告『桜沢窯跡第2支群』第41集

吉見町教育委員会

- ・吉見町埋蔵文化財調査報告書 町内遺跡 14

埼玉県立川の博物館

- ・紀要 第20号
- ・埼玉の森と林業 20号
- ・かわはく No.66
- ・かわはく No.67
- ・タカ ハヤブサ フクロウ～荒川流域の猛禽類～
- ・「楽しい 美味しい 江戸の水辺」

春日部市教育委員会

- ・3800年前の縄文文化人の食文化
- ・春日部市埋蔵文化財発掘調査報告書 権現山遺跡3次地点 第22集
- ・春日部市埋蔵文化財発掘調査報告書 鷺前遺跡1次地点 第23集

戸田市立郷土博物館

- ・市史調査報告書 戸田市関係新聞記事索引（平成Ⅲ）第22集
- ・たんけん 昔のくらし
- ・常設展示図録【リニューアル版】
- ・戸田市立郷土博物館要覧【平成30年度】

- ・戸田市立郷土博物館要覧【令和元年度】
- ・戸田市立郷土博物館要覧【令和2年度】

埼玉県立歴史と民族の博物館

- ・紀要 第14号
- ・特別展 武蔵国の旗本
- ・特別展 銘仙
- ・太平記絵巻
- ・博物館ブックレット『太平記絵巻を知る』
- ・紀要 第15号
- ・令和2年度無形民俗文化財調査事業成果物(DVD)

富士見市立難波田城資料館

- ・令和2年度春季企画展 お風呂の富士見誌
- ・学びの広場 難波田城 地域・市民とともに20年

富士見市立水子貝塚資料館

- ・令和元年度 企画展 ―まもり、伝える縄文のムラ―

埼玉県教育委員会

- ・埋文さいたま 第63号

上里町立郷土資料館

- ・研究紀要 第17号
- ・研究紀要 第18号

加須市教育委員会

- ・加須市埋蔵文化財調査報告書 第13集

行田市郷土博物館

- ・第30回テーマ展 忍藩の武術
- ・研究報告 第10集
- ・忍藩主松平下総守家

春日部市郷土資料館

- ・1960年代の春日部―1963 武里団地 1964年 東京オリンピック 1967 埼玉国体

埼玉県立さきたま史跡の博物館

- ・盾持人埴輪の世界
- ・埼玉県立史跡の博物館紀要 第14号

サトエ記念 21世紀美術館

- ・卒寿記念 寺井力三郎展～暮らしに息づく絵画～

蓮田市教育委員会

- ・埼玉県蓮田市文化財調査報告書「関戸野久保遺跡―第1調査地点」第61集
- ・埼玉県蓮田市文化財調査報告書「椿山遺跡―第13調査地点」第62集

草加市立歴史民俗資料館

- ・草加×東洋一のマンモス だんち展
- ・令和元年度 草加市立歴史民俗資料館年報

ふじみ野市立大井郷土博物館

- ・ふじみ野の古墳と埴輪 ～ハケ遺跡古墳群と埴輪～

宮代町郷土資料館

- ・資料館のあしもと 地蔵院遺跡展 ～考古学のいろは～

川口市立科学館

- ・年報 令和元年度

さいたま市岩槻人形博物館

- ・「こどものかたち―創作人形の力展 ～平田郷陽・野口光彦を中心に～」

熊谷市立江南文化財センター

- ・『諏訪木遺跡Ⅳ』第35集
- ・『肥塚古墳群Ⅱ・肥塚館跡』第36集
- ・『緑川遺跡』第37集
- ・『諏訪木遺跡Ⅴ 上之古墳群第3・4号墳』第38集

埼玉県日高市教育委員会

- ・日高市埋蔵文化財調査報告書 王神 第40集
- ・日高市埋蔵文化財調査報告書 宿東 第41集
- ・日高市埋蔵文化財調査報告書 宮久保 第42集

埼玉県立自然の博物館

- ・埼玉の自然誌

埼玉県埋蔵文化財調査事業団

- ・埼玉埋文リポート 第454集
- ・埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 向原A／芦荻場（第1分冊）第465集
- ・埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 向原A／芦荻場（第2分冊）第465集

- ・埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 向原A／
芦荻場（第3分冊）第465集
- ・行田市 中通南遺跡 第454集
- ・加須市 樋の口遺跡 第455集
- ・久喜市 栗橋宿跡Ⅲ（第1分冊）第456集
- ・久喜市 栗橋宿跡Ⅲ（第2分冊）第456集
- ・久喜市 小林八束1遺跡Ⅲ（第1分冊）第457集
- ・久喜市 小林八束1遺跡Ⅲ（第2分冊）第457集
- ・久喜市 小林八束1遺跡Ⅲ（第3分冊）第457集
- ・久喜市 栗橋宿跡Ⅳ 第458集
- ・上尾市 稻荷台遺跡Ⅳ 第459集
- ・久喜市 栗橋宿本陣跡Ⅱ（第1分冊）第460集
- ・久喜市 栗橋宿本陣跡Ⅱ（第2分冊）第460集
- ・加須市 長竹遺跡Ⅳ（第1分冊）第461集
- ・加須市 長竹遺跡Ⅳ（第2分冊）第461集
- ・加須市 長竹遺跡Ⅳ（第3分冊）第461集
- ・加須市 長竹遺跡Ⅳ（第4分冊）第461集
- ・加須市 長竹遺跡Ⅴ 第462集
- ・久喜市 栗橋宿跡Ⅴ 第463集
- ・蓮田市 新井堀の内遺跡 第464集
- ・研究紀要 第34号

神川町教育委員会

- ・神川町埋蔵文化財調査報告『観音院南遺跡第2次・出土遺跡等整理報告』第15集

埼玉ピースミュージアム

- ・渋沢栄一と平和

鶴ヶ島市遺跡調査会

- ・鶴ヶ島市埋蔵文化財調査報告「若葉台遺跡Z地点発掘調査報告書」第88集

熊谷市立熊谷図書館

- ・熊谷染関連資料調査報告書Ⅳ

鶴ヶ島市教育委員会

- ・鶴ヶ島市内遺跡発掘調査報告書Ⅷ 仲道柴山遺跡第22次

〈千葉県〉

市立市川考古博物館

- ・市立市川考古博物館 館報 第47号

船橋市飛ノ台史跡公園博物館

- ・紀要 第16号
- ・第19回縄文コンテンプラリー展inふなばし
遺跡のアート劇場

千葉県立関宿城博物館

- ・「関東のへそ〜地勢とくらしのひすとり〜」

千葉県立中央博物館

- ・「オリンピック・パラリンピック」と千葉の
スポーツ史

- ・千葉県立中央博物館研究報告 第15巻 第1号

袖ヶ浦市郷土博物館

- ・令和2年企画展Ⅰ「ごはん」の作り方 ―こ
め作りから見る、暮らしと祈り―

千葉縄文研究会

- ・千葉縄文研究 別冊Ⅱ 関東地方における出
現期押型文土器の研究

〈東京都〉

國學院大学博物館

- ・国学院大学博物館研究報告 第37輯

日本博物館協会

- ・博物館研究 Vol.55 No.6 通巻626号
- ・博物館研究 Vol.55 No.4 通巻622号
- ・別冊博物館研究 Vol.55 No.4 通巻623号
- ・博物館研究 Vol.55 No.5 通巻624号
- ・博物館研究 Vol.55 No.7 通巻626号
- ・博物館研究 Vol.55 No.8 通巻627号
- ・博物館研究 Vol.55 No.9 通巻628号
- ・博物館研究 Vol.55 No.10 通巻629号
- ・博物館研究 Vol.55 No.11 通巻630号
- ・博物館研究 Vol.55 No.12 通巻631号
- ・博物館研究 Vol.56 No.1 通巻632号
- ・博物館研究 Vol.56 No.2 通巻633号
- ・博物館研究 Vol.56 No.3 通巻634号

- ・大津波被災文化財保存修復技術連携プロジェクト 安定化しより (2019 年度版)
- ・令和元年度日本の博物館総合調査報告書

公益財団法人 渋沢栄一記念財団

- ・青淵 第 853 号
- ・青淵 第 854 号
- ・青淵 第 855 号
- ・青淵 第 856 号
- ・青淵 第 858 号
- ・青淵 第 859 号
- ・青淵 第 860 号
- ・青淵 第 861 号
- ・青淵 第 862 号
- ・青淵 第 863 号
- ・青淵 第 864 号

東京家政学院生活文化博物館

- ・年報 第 29 号
- ・復興から未来へ ～博物館と地域のこれから～

テイケイトレード株式会社

- ・三鷹市埋蔵文化財調査報告 井の頭池遺跡群 A V

独立行政法人 国立科学博物館

- ・milsil 第 13 巻第 3 号 (通巻 75 号)
- ・milsil 第 13 巻第 4 号 (通巻 76 号)
- ・milsil 第 13 巻第 5 号 (通巻 77 号)
- ・milsil 第 13 巻第 6 号 (通巻 78 号)
- ・milsil 第 14 巻第 1 号 (通巻 79 号)
- ・milsil 第 14 巻第 2 号 (通巻 80 号)

玉川大学教育博物館

- ・博物館ニュース「SHU」
- ・紀要 第 17 号
- ・玉川大学教育博物館 館報 第 18 号
- ・博物館ニュース「SHU」

共和開発株式会社

- ・三鷹市埋蔵文化財調査報告書『滝坂遺跡』第 46 集

立正大学経営学部

- ・立正経営論集 第 52 巻 第 2 号
- ・立正経営論集 第 52 巻

清瀬市郷土博物館

- ・清瀬市郷土博物館 年報 平成 30 年度
- ・絵本原画にみる横内襄展
- ・下宿内山遺跡 ―江戸～昭和の清瀬を掘―

三鷹市スポーツと文化部生涯学習課

- ・三鷹市文化財年報 2 平成 30 (2018) 年度

公益財団法人 日本文化財保護協会

- ・『紀要』第 4 号

明治大学博物館

- ・2020 年度明治大学博物館特別展 氷期の狩人は黒曜石の山をめざす ―明治大学の黒曜石考古学―
- ・明治大学博物館研究報告

駒澤大学禅文化歴史博物館

- ・駒澤大学禅文化歴史博物館紀要 第 4 号
- ・松平家忠とその時代～『家忠日記』と本光寺～

大田区教育委員会

- ・東京都大田区 久ヶ原遺跡 発掘調査報告書 港区

- ・図説 港区の歴史

帝京大学総合博物館

- ・古代多摩に生きたエミシの謎を追え
- ・理工学部のラボのなか！ ―ニワトリとワザの研究―
- ・帝京大学総合博物館 館報 第 2 号
- ・帝京大学総合博物館 館報 第 3 号

立教学院展示館

- ・聖路加看護教育の 100 年

HOSEI ミュージアム

〈神奈川県〉

赤星直忠博士文化財資料館

- ・赤星直忠博士文化財資料館だより 第 16 号
- ・赤星直忠博士文化財資料館だより 第 17 号

女子美術大学美術館

- ・年報 第17号

大磯町郷土資料館

- ・年報 ―令和元年度―

近藤英夫氏

- ・Circum-Pacific 1
- ・Circum-Pacific 4
- ・Circum-Pacific 5
- ・Circum-Pacific 6
- ・Circum-Pacific 7
- ・Circum-Pacific 8

〈山梨県〉

山梨県立考古博物館

- ・考古博物館だより No. 89

〈新潟県〉

長岡市立科学博物館

- ・NKH（長岡市立科学博物館館報）No. 104

〈長野県〉

長野県埋蔵文化財センター

- ・羽場権現堂遺跡 中央新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

〈愛知県〉

南山大学人類学博物館

- ・南山大学人類学博物館紀要 第39号

〈滋賀県〉

高島市教育委員会

- ・高島市内遺跡調査報告書 第35集
- ・大溝城遺跡発掘調査報告書 第36集
- ・法連寺・太田町遺跡発掘調査報告書 第37集

〈京都府〉

同志社大学歴史資料館

- ・同志社大学歴史資料館 館報 第23号
- ・同志社大学歴史資料館調査研究報告 公家町遺跡 発掘調査報告書 ―同志社幼稚園移転新築工事に伴う発掘調査―

〈大阪府〉

茨木市立文化財資料館

- ・茨木市立文化財資料館 館報 第5号

茨木市教育委員会 教育総務部

- ・茨木市歴史建造物調査報告書 I 神社編 第77集

〈兵庫県〉

関西学院大学博物館

- ・公開研究会報告 小袖裂を観る 第2号
- 大手前大学史学研究所
- ・達身寺仏像軍調査報告書
 - ・達身寺仏像軍調査報告書2 ―日本美術院彫刻等修理記録翻刻編―

〈鳥取県〉

鳥取県教育文化財団

- ・埋蔵文化財発掘調査報告書「小鴨道祖神遺跡」
- ・埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ「山ノ下遺跡Ⅱ・平ノ前遺跡Ⅱ」

〈愛媛県〉

愛媛大学埋蔵文化財調査室

- ・愛媛大学埋蔵文化財調査室年報 ―2017・2018年度―
- ・文京遺跡Ⅶ-2 ―文京遺跡14次調査―（表・図版編）
- ・文京遺跡Ⅶ-2 ―文京遺跡14次調査―（本文編）

〈福岡県〉

西南学院大学博物館

- ・西南学院大学博物館 年報 第11号
- ・西南学院大学博物館 年報 第12号
- ・西南学院大学博物館研究紀要 第8号

〈熊本県〉

熊本県教育委員会

- ・熊本県文化財調査報告 八代海周辺の装飾古墳 ―発生と展開― 第337集
- ・熊本県文化財調査報告 二本木遺跡群8(春日地区)(田崎地区)牧崎遺跡(本文編)第338集
- ・熊本県文化財調査報告 二本木遺跡群8(春日地区)(田崎地区)牧崎遺跡(図版編)第338集

- ・熊本県文化財調査報告 赤星石道遺跡・赤星灰塚遺跡 第339集
- ・熊本県文化財調査報告 北園上野古墳群 第340集

〈佐賀県〉

鎮西本山 松尾山 護国勝寺

- ・鎮西本山 松尾山 護国勝寺 宝物目録

〈鹿児島県〉

鹿児島大学総合研究博物館

- ・News Letter No.45
- ・鹿児島大学総合研究博物館年報 No.18

立正大学博物館年報 19

(令和 2 (2020) 年度)

令和 3 (2021) 年 6 月 15 日 発行

編集・発行 立正大学博物館

〒 360-0194 埼玉県熊谷市万吉 1700

TEL. 048 - 536 - 6150 FAX. 048 - 536 - 6170

E - mail : museum@ris.ac.jp

URL <http://www.ris.ac.jp/museum/>

印刷・製本：望月印刷株式会社